

一般国道9号（名和淀江道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 XVII

鳥取県西伯郡大山町

TOYO SHIGE KAMI KAN BARA
豊成上神原遺跡

TOYOSHIGE KAMI KANA I DANI MINE
豊成上金井谷峰遺跡

2011

鳥取県埋蔵文化財センター
国土交通省 倉吉河川国道事務所



1 豊成上金井谷峰遺跡調査地遠景(調査後：南東から)

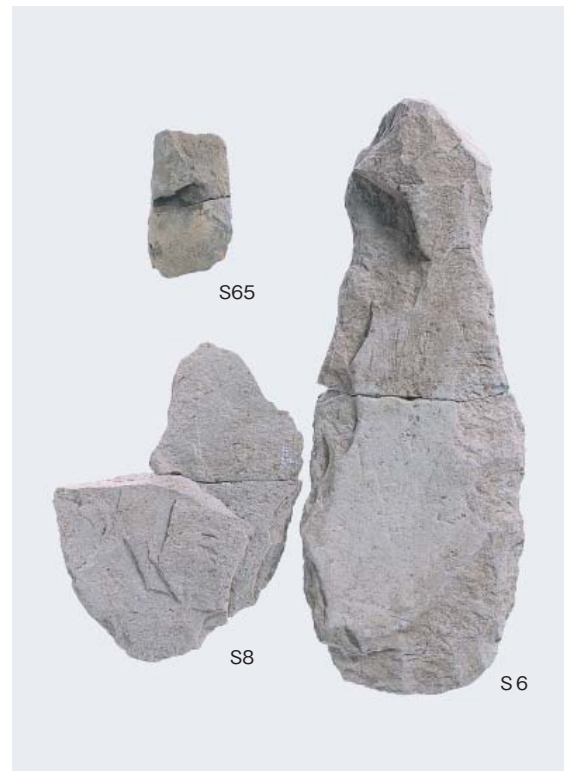


2 豊成上神原遺跡調査地遠景(調査後：北西から)

巻頭図版 2



1 豊成上金井谷峰遺跡 SI 1 完掘状況(北東から)



2 豊成上金井谷峰遺跡出土石器(石材産地同定分析試料)

序

一般国道9号名和淀江道路の改築に伴う発掘調査は、平成12年度から行われ、平成21年度末時点で遺跡数は28遺跡、調査面積は延べ約21万平方メートルに及んでいます。

この発掘調査は、平成17年度から鳥取県直営の事業となり、鳥取県埋蔵文化財センターが担当することとなりました。

そのうち、大山町にある豊成上神原遺跡、豊成上金井谷峰遺跡では、縄文時代の落とし穴、弥生時代の集落などを検出するに至り、この地域の歴史を解明するための重要な資料を確認することができました。

本書は、その調査結果を報告書としてまとめたものです。この報告書が、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財が郷土の誇りとなることを期待しております。

本書をまとめるにあたり、国土交通省倉吉河川国道事務所、地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力を頂きました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成23年3月

鳥取県埋蔵文化財センター

所 長 久保 穰二郎

序 文

一般国道9号は山陰地方を東西に結ぶ主要幹線道路であり、広域交通はもとより、観光交通、生活交通など、多様な交通を担う重要な路線です。

このうち、国土交通省倉吉河川国道事務所は、東伯郡湯梨浜町から米子市(鳥取-鳥根県境)までを管轄しており、時代の要請に沿った各種の道路整備事業を実施しているところです。

名和淀江道路は、西伯郡大山町から米子市淀江町にかけての多種多様な交通による交通混雑の緩和、安全・円滑な交通の確保のほか、災害時の緊急輸送路の代替路線としての機能分担などを目的とし、さらに山陰の地方都市間の連携を強化するとともに、環日本海交流の基幹軸の一翼を担う高規格幹線道路(自動車専用道路)として整備を行っています。

このルートには、多数の埋蔵文化財包蔵地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第94条の規定に基づき、鳥取県教育委員会教育長に通知した結果、事前に発掘調査を実施し、記録保存を行うこととなりました。

平成21年度は「西坪上高尾原遺跡」、「西坪下馬駄ヶ峰遺跡」、「小竹上鷹ノ尾遺跡」、「倉谷西中田遺跡」、「倉谷荒田遺跡」、「豊成上神原遺跡」、「豊成上金井谷峰遺跡」、「松河原上奥田第3遺跡」の8遺跡の本調査について、鳥取県埋蔵文化財センターと発掘調査の委託契約を締結し、発掘調査を行いました。

本書は、上記の「豊成上神原遺跡」、「豊成上金井谷峰遺跡」の調査結果をまとめたものです。この貴重な記録が、文化財に対する認識と理解を深めるため、ならびに、教育及び学術研究のために広く活用されることを願うと同時に、国土交通省の道路事業が、文化財保護に深い関心を持ち、記録保存に努力していることをご理解いただければ幸いです。

事前の協議をはじめ、現地での調査から報告書の編集に至るまでご尽力いただいた鳥取県埋蔵文化財センターの関係者に対して、心から感謝申し上げます。

平成23年3月

国土交通省 倉吉河川国道事務所

所長 江角 忠也

例 言

1. 本報告書は、国土交通省倉吉河川国道事務所の委託により、鳥取県埋蔵文化財センターが、一般国道9号(名和淀江道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査事業として、平成21年度に行った豊成^{とよしげ}上^{かみかんばら}神原遺跡、豊成上金井谷峰^{とよしげかみな いだにみね}遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本報告書に記載した遺跡の所在地及び調査面積は以下のとおりである。
豊成上神原遺跡：西伯郡大山町豊成字上神原 外 調査面積：3,475㎡
豊成上金井谷峰遺跡：西伯郡大山町豊成字上金井谷峰1972 外 調査面積：9,211㎡
3. 本報告書で示す標高は、2級基準点H18-2-3(豊成上神原遺跡)、H18-2-2(豊成上金井谷峰遺跡)を基準とする標高値を使用した。方位は公共座標北を示す。磁北は両遺跡とも、座標北に対し約7°06′西偏する。なお、X：、Y：の数値は世界測地系に準拠した公共座標第V系の座標値である。
4. 本報告書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1/50,000地形図「大山」・「赤碕」、大山町作成の1/5,000「大山町地形図」を使用した。
5. 本報告にあたり、以下の内容を業者委託した。
豊成上神原遺跡：調査前後航空写真撮影、調査前後地形測量(一部)、出土炭化材の年代測定
豊成上金井谷峰遺跡：調査前後航空写真撮影、調査前地形測量、調査後地形測量(一部)、出土石器の石材産地同定
6. 本報告書に掲載した遺物の実測・浄書は埋蔵文化財センター及び同発掘事業室調査担当で行った。
7. 本報告書で使用した遺構・遺物写真は調査担当職員が撮影した。
8. 本報告書の編集は濱・森本・濱本が行った。執筆は調査担当職員が分担して行い、目次に執筆者名を記した。
9. 発掘調査によって作成された図面・写真などの記録類、出土遺物は鳥取県埋蔵文化財センターで保管している。
10. 現地調査及び報告書作成にあたっては、大山町教育委員会に御協力いただいた。明記して深謝いたします。

凡 例

- 遺物の注記における遺跡名には以下の略語を用い、併せて「遺構名、遺物番号、日付」を記入した。
豊成上神原遺跡：カミハラ
豊成上金井谷峰遺跡：カナイ
- 本報告書で用いた遺構・トレンチの略号は以下のとおりである。
SI：竪穴住居跡 SS：テラス状遺構 SD：溝・溝状遺構 SK：土坑 P：柱穴・ピット Tr：トレンチ
Gr：グリッド
- 本調査における遺構番号（新）は発掘調査時のもの（旧）と変更している。新旧の遺構名・番号の対応は本頁末の遺構名新旧対照表に示している。
- 本書における実測図の縮尺については、基本的に以下の縮尺としている。
遺構図 SI：1/80、SD：1/40・1/60・1/80、SS：1/80、SK：1/40・1/80、道路状遺構：1/160
遺物出土状況・炭化材出土状況：1/20
遺物実測図 土器：1/4、石器：2/3・1/2・1/3・1/4・1/6、鉄滓：1/4
- 本書における土色は、基本的には『新版 標準土色帖』による。
- 遺構図・遺物実測図に用いたトーン及び記号は、特に説明がない限り以下のとおりである。
■：赤色顔料付着範囲 ■：石器磨り面 S：石器・礫 F：鉄器・鉄滓
●：土器・石器出土ポイント
- 遺物実測図の断面は須恵器を黒塗りとし、それ以外のものは白抜きで示している。また、遺物実測図中における記号は以下のとおりである。
→：ケズリの方向（砂粒の動き）
- 遺物観察表の法量記載における※は推定復元値、△は現存値を示す。
- 本報告書における遺構・遺物の時期決定には下記参考文献を参照した。

参考文献

- 小林達雄編1989 『縄文土器大観4』小学館
清水真一 1992 「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』木耳社
濱田竜彦 2003 「大山北麓地域における弥生時代後期土器の編年」『史跡妻木晩田遺跡第4次発掘調査報告書－洞ノ原地区西側丘陵の発掘調査－』鳥取県教育委員会
牧本哲雄 1999 「古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ・園第6遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団
田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店
角田徳幸 2003 「第5章まとめ 第3節奈良・平安時代の施設群」『史跡出雲国府跡－1－』鳥取県教育委員会

表1 豊成上神原遺跡遺構名新旧対照表

新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名
SK 1	SK 8	SK 8	SK11	SD 1	SD 2
SK 2	SK 9	SK 9	SK12	SD 2	SD 3
SK 3	SK 2	SK10	SK10	道路状遺構	道路状遺構
SK 4	SK 5	SK11	SK 1		
SK 5	SK 6	SK12	SD 1		
SK 6	SK 4				
SK 7	SK 7				

表2 豊成上金井谷峰遺跡遺構名新旧対照表

新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名
SK 1	SK 7	SK 9	SK15	SD 2	SD 7
SK 2	SK 9	SK10	SK21		
SK 3	SK 3	SK11	SK 2		
SK 4	SK 4	SK12	焼土 1		
SK 5	SK 6	SK13	SK10		
SK 6	SK 5	SK14	SK20		
SK 7	SK19	SK15	SK13		
SK 8	SK16	SD 1	SD 6		

目 次

序	
序文	
例言	
凡例	
第1章 調査の経緯	
第1節 調査に至る経緯……………(濱) 1	1 遺跡の立地……………(濱) 35
第2節 調査の方法と経過……………(濱) 2	2 調査地内の土層堆積……………(濱) 35
第3節 調査体制……………(濱) 4	第2節 調査の概要……………(濱) 41
第2章 遺跡の位置と環境	第3節 縄文時代の調査…………… 43
第1節 地理的環境……………(濱) 5	1 概要……………(濱) 43
第2節 歴史的環境……………(濱) 5	2 土坑……………(濱・濱本・野島) 43
第3章 豊成上神原遺跡の調査	第4節 弥生時代の調査…………… 47
第1節 遺跡の立地と層序…………… 9	1 概要……………(濱・野島) 47
1 遺跡の立地……………(森本) 9	2 竪穴住居跡……………(濱・野島) 47
2 調査地内の土層堆積……………(森本) 9	第5節 古墳時代の調査…………… 52
第2節 調査の概要……………(森本) 13	1 概要……………(濱・野島) 52
第3節 縄文時代の調査…………… 15	2 テラス状遺構……………(野島) 52
1 概要……………(森本) 15	3 土坑……………(濱本) 55
2 土坑……………(森本・石原) 15	第6節 時期不明の遺構…………… 57
第4節 古墳時代後期から古代の調査…………… 20	1 テラス状遺構……………(野島) 57
1 概要……………(森本) 20	2 土坑……………(濱・濱本・油利) 57
2 土坑……………(石原) 21	3 溝……………(濱・濱本・野島) 59
3 溝……………(森本) 22	第7節 遺構外出土遺物(土器)……………(野島) 62
4 IV層出土遺物……………(石原) 23	第8節 遺構外出土遺物(石器)……………(油利) 67
5 III層出土遺物……………(石原) 24	第9節 豊成上金井谷峰遺跡遺物観察表… 84
第5節 時期不明の遺構…………… 25	第10節 自然科学分析の成果…………… 95
1 概要……………(森本) 25	第11節 豊成上金井谷峰遺跡の総括…(濱) 111
2 土坑……………(森本) 25	第5章 総括
3 溝……………(森本) 25	第1節 特論 落とし穴の立地について
4 道路状遺構……………(森本) 26	～豊成上神原遺跡・豊成上金井谷峰遺
第6節 調査地内出土遺物……………(森本) 29	跡の理解のために～……………(濱) 113
第7節 豊成上神原遺跡遺物観察表…………… 29	第2節 豊成遺跡群の総括……………(濱) 118
第8節 自然科学分析の成果…………… 30	
第9節 豊成上神原遺跡の総括……………(森本) 33	
第4章 豊成上金井谷峰遺跡の調査	写真図版
第1節 遺跡の立地と層序…………… 35	報告書抄録

挿図目次

第1図	名和淀江道路関係遺跡位置図……………	1	第35図	暦年較正結果……………	32
第2図	豊成上神原遺跡グリッド配置図……………	2	第36図	暦年代の分布……………	32
第3図	豊成上金井谷峰遺跡グリッド配置図…	3	豊成上金井谷峰遺跡		
第4図	遺跡位置図……………	5	第37図	調査地周辺の地形……………	35
第5図	調査地位置図……………	6	第38図	調査前地形測量図……………	36
第6図	周辺遺跡分布図……………	7	第39図	豊成上金井谷峰遺跡遺構配置図…	37・38
豊成上神原遺跡			第40図	1区トレンチ1～5土層断面……………	39
第7図	調査地周辺の地形……………	9	第41図	1区南壁土層断面……………	40
第8図	調査地基本層序および 調査前地形測量図……………	10	第42図	2区土層断面……………	41
第9図	調査地土層断面図(1)……………	11	第43図	3区土層断面……………	42
第10図	調査地土層断面図(2)……………	12	第44図	SK 1 ……………	43
第11図	調査後地形測量図……………	13	第45図	SK 2 ……………	43
第12図	V層上面地形測量図……………	14	第46図	SK 3 および出土遺物 ……………	44
第13図	IV層上面地形測量図……………	14	第47図	SK 4 ……………	44
第14図	SK 1 ……………	15	第48図	SK 5 ……………	45
第15図	縄文時代遺構配置図……………	16	第49図	SK 6 ……………	45
第16図	SK 2 ……………	17	第50図	SK 7 ……………	46
第17図	SK 3 ……………	17	第51図	SK 8 ……………	46
第18図	SK 4 ……………	18	第52図	SK 9 ……………	46
第19図	SK 5 ……………	18	第53図	SK10 ……………	46
第20図	SK 6 ……………	19	第54図	SI 1 (拡張後)……………	49
第21図	SK 7 ……………	19	第55図	SI 1 (拡張前)……………	50
第22図	SK 8 ……………	20	第56図	SI 1 (拡張後)床面出土遺物……………	50
第23図	SK 9 ……………	21	第57図	SS 1 ……………	53
第24図	SK10 ……………	22	第58図	SS 1 出土遺物 ……………	53
第25図	SK10出土遺物 ……………	22	第59図	SS 2 ……………	54
第26図	SD 1 ……………	23	第60図	SK11 ……………	55
第27図	Ⅲ層堆積範囲図……………	24	第61図	SK11出土遺物 ……………	56
第28図	IV層出土遺物……………	25	第62図	SS 3 ……………	57
第29図	Ⅲ層出土遺物……………	25	第63図	SK12 ……………	57
第30図	SK11 ……………	26	第64図	SK13 ……………	58
第31図	SK12 ……………	26	第65図	SK14 ……………	58
第32図	SD 2 ……………	27	第66図	SK15 ……………	58
第33図	道路状遺構……………	28	第67図	SD 1 ……………	59
第34図	調査地内出土遺物……………	29	第68図	SD 2 ……………	59
			第69図	自然流路……………	60
			第70図	自然流路出土遺物……………	61

第71図	表土・1区I層出土遺物	62
第72図	1区II層出土遺物	63
第73図	3区表土他出土遺物	65
第74図	3区VII～IX層他出土遺物	66
第75図	打製石斧出土状況	67
第76図	打製石斧(1)	68
第77図	打製石斧(2)	69
第78図	打製石斧周辺出土遺物	69
第79図	グリッド別黒曜石石器分布図	70
第80図	台形石器・尖頭器	72
第81図	石鏃	73
第82図	石錐・石匙・スクレイパー	74
第83図	楔形石器・石核・ブランク・剥片	75

第84図	打製石斧・磨製石斧	76
第85図	石錘	77
第86図	磨石(1)	78
第87図	磨石(2)	79
第88図	磨石(3)	80
第89図	敲石	81
第90図	石皿・台石・砥石	83
第91図	黒曜石原産地	97
第92図	安山岩(サヌカイト)の原産地	97
第93図	金山産地	108
第94図	落とし穴立地の例	115
第95図	豊成上神原遺跡・豊成上金井谷峰遺跡の 落とし穴分布	116

挿表目次

表1	豊成上神原遺跡遺構名新旧対照表	
表2	豊成上金井谷峰遺跡遺構名新旧対照表	
表3	出土土器観察表	29
表4	出土石器観察表	29
表5	鉄関連遺物観察表	29
表6	測定資料及び処理	30
表7	放射性炭素年代測定及び暦年較正の 結果	31
表8	ピット計測表	50
表9	グリッド別石器組成表	71
表10	土器観察表(1)	84
表11	土器観察表(2)	85
表12	土器観察表(3)	86
表13	接合資料取上番号一覧	86
表14	石器観察表(1)	86
表15	石器観察表(2)	87
表16	石器観察表(3)	88
表17	石器観察表(4)	89
表18	石器観察表(5)	90
表19	石器観察表(6)	91
表20	石器観察表(7)	92
表21	石器観察表(8)	93

表22	石器観察表(9)	94
表23	黒曜石原産地原石群名(1)	98
表24	黒曜石原産地原石群名(2)	99
表25	黒曜石製遺物群の元素比の平均値と 標準偏差値(1)	100
表26	黒曜石製遺物群の元素比の平均値と 標準偏差値(2)	101
表27	サヌカイト(安山岩)の原産地における原石 群の元素比の平均値と標準偏差値	102
表28	原産地不明の組成の似たサヌカイト(安山 岩)製遺物で作られた遺物群の元素比の平均 値と標準偏差値(1)	103
表29	原産地不明の組成の似たサヌカイト(安山 岩)製遺物で作られた遺物群の元素比の平均 値と標準偏差値(2)	104
表30	岩屋原産地からのサヌカイト原石66個の分 類結果	105
表31	和泉・岸和田原産地からのサヌカイト原石 72個の分類結果	105
表32	豊成上金井谷峰遺跡出土黒曜石、安山岩製 遺物の非破壊不定形塊状分析による化学組 成結果	107

表33	豊成上金井谷峰遺跡出土黒曜石製遺物の元素比分析結果……………	107
表34	豊成上金井谷峰遺跡出土安山岩製遺物の元素比分析結果……………	107
表35	豊成上金井谷峰遺跡出土石器石材産地同定	

結果……………	107	
表36	金山産地内各地点採取原石の各群出現頻度……………	108
表37	豊成上金井谷峰遺跡落とし穴一覧……………	111

巻頭図版目次

巻頭図版 1	1	豊成上金井谷峰遺跡調査地遠景 (調査後：南東から)
	2	豊成上神原遺跡調査地遠景 (調査後：北西から)

巻頭図版 2	1	豊成上金井谷峰遺跡 SI 1 完掘 状況(北東から)
	2	豊成上金井谷峰遺跡出土石器 (石材産地同定分析試料)

文中写真目次

写真 1	豊成上神原遺跡表土剥ぎ風景……………	4
写真 2	豊成上金井谷峰遺跡SI 1 調査風景……………	4

写真 3	SK11遺物出土状況……………	55
写真 4	自然流路作業風景……………	61

図版目次

豊成上神原遺跡

PL. 1	1	調査地周辺の地形(北から)
	2	調査地周辺の地形(西から)
PL. 2	1	調査地南東側完掘(北東から)
	2	調査地南東側完掘(北西から)
PL. 3	1	調査地北側完掘(東から)
	2	調査地北側完掘(南から)
PL. 4	1	調査地西側完掘(北東から)
	2	調査地西側完掘(南西から)
PL. 5	1	調査地中央部<町道下>完掘(北から)
	2	調査地西側V層上面完掘(南西から)
PL. 6	1	調査地西側IV層上面完掘(南西から)
	2	調査地西側IV層上面検出状況 (北から)
PL. 7	1	調査地西側北壁土層断面(南から)
	2	SK 2 (南西から)
	3	SK 2 土層断面(北西から)

	4	SK 2 検出状況(南から)
PL. 8	1	SK 1 (南東から)
	2	SK 1 土層断面(東から)
	3	SK 3 (東から)
	4	SK 3 底面ピット杭痕跡(東から)
	5	SK 3 土層断面(東から)
	6	SK 3 検出状況(北から)
PL. 9	1	SK 4 (北西から)
	2	SK 4 底面ピット土層断面(西から)
	3	SK 4 土層断面(南東から)
	4	SK 6 (北東から)
	5	SK 6 土層断面(南西から)
	6	SK 6 検出状況(北西から)
PL.10	1	SK 5 (西から)
	2	SK 5 土層断面(南から)
	3	SK 7 (東から)
	4	SK 7 土層断面(西から)

- 5 SK 7 検出状況(北から)
- PL.11 1 SK 8 炭化物出土状況(北西から)
- 2 SK 8 (北西から)
- 3 SK 8 土層断面(南から)
- 4 SK 8 検出状況(南東から)
- PL.12 1 SK 9 焼土検出状況(東から)
- 2 SK 9 (南西から)
- 3 SK 9 土層断面(西から)
- 4 SK 9 底面ピット土層断面(西から)
- 5 SK 9 底面ピット検出状況(北から)
- PL.13 1 SK10(北西から)
- 2 SK10土層断面(北から)
- 3 SK10検出状況(西から)
- 4 SK11(北から)
- 5 SK11 A-A' 土層断面(南東から)
- 6 SK11 B-B'、C-C' 土層断面
(南から)
- 7 SK12(南から)
- 8 SK12土層断面(南から)
- PL.14 1 SD 1 (東から)
- 2 SD 1 (西から)
- PL.15 1 SD 1 土層断面(東から)
- 2 SD 1 A-A' 土層断面(東から)
- 3 SD 1 B-B' 土層断面(東から)
- 4 SD 1 C-C' 土層断面(東から)
- 5 SD 2 (北から)
- PL.16 1 SD 2 A-A' 土層断面(南から)
- 2 SD 2 B-B' 土層断面(南から)
- 3 SD 2 検出状況(北から)
- 4 道路状遺構土層断面(東から)
- 5 道路状遺構(北西から)
- PL.17 1 道路状遺構検出状況(東から)
- 2 道路状遺構轍痕跡(南東から)
- 3 III層出土土器
- 4 調査地内出土石器
- PL.18 1 調査地内出土土器
- 2 調査地内出土鉄関連遺物

豊成上金井谷峰遺跡

- PL.19 1 遺跡全景(調査前：南東から)
- 2 遺跡全景(調査前：東から)
- PL.20 1 遺跡全景(調査後：北から)
- 2 遺跡全景(調査後：南から)
- PL.21 1 1区西側完掘状況(西から)
- 2 1区東側完掘状況(南から)
- 3 1区東側南壁土層(北東から)
- PL.22 1 2区完掘状況(北東から)
- 2 3区頂部造成土除去後(北西から)
- 3 2区南壁土層断面(北東から)
- 4 3区南壁土層断面(北西から)
- PL.23 1 3区完掘状況(南西から)
- 2 3区完掘状況(南東から)
- 3 3区斜面部南側土層断面(北西から)
- 4 3区南壁谷部土層断面(北西から)
- PL.24 1 SK 1 検出状況(南から)
- 2 SK 1 土層断面(南から)
- 3 SK 1 完掘状況(南から)
- 4 SK 2 検出状況(西から)
- 5 1区西側完掘状況(SK 2・13周辺：南東から)
- PL.25 1 SK 2 土層断面(西から)
- 2 SK 2 完掘状況(西から)
- 3 SK 3 土層断面(南から)
- 4 SK 3 完掘状況(西から)
- 5 SK 4 土層断面(南から)
- 6 SK 4 完掘状況(南から)
- 7 SK 5 土層断面(北から)
- 8 SK 5 完掘状況(南から)
- PL.26 1 SK群(SK 3～6)完掘状況(西から)
- 2 SK 6 土層断面(南から)
- 3 SK 6 完掘状況(南から)
- 4 SK 7 土層断面(北から)
- 5 SK 7 完掘状況(西から)
- PL.27 1 SK 8 検出状況(北西から)
- 2 SK 8 土層断面(北から)
- 3 SK 8 完掘状況(南から)
- 4 SK 9 検出状況(北から)

	5	SK 9 土層断面(南西から)		4	SK12土層断面(南東から)
	6	SK 9 完掘状況(南西から)		5	SK12完掘状況(南東から)
	7	SK10土層断面(東から)		6	SK12硬化面検出状況(東から)
	8	SK10完掘状況(東から)		PL.36	1 SK13土層断面(南から)
PL.28	1	打製石斧(S6)・磨石(S10)出土状況 (北から)(1)		2	SK13完掘状況(南から)
	2	打製石斧出土状況(北から)		3	SK14土層断面(南から)
	3	打製石斧(S6)・磨石(S10)出土状況 (北から)(2)		4	SK14検出状況(南西から)
	4	打製石斧(S7)出土状況(北から)		5	SK14完掘状況(南から)
PL.29	1	打製石斧出土状況(西から)		6	SK15土層断面(西から)
	2	G24グリッド石器出土状況(北から)		PL.37	1 SD 1 完掘状況(西から)
PL.30	1	SI 1 (新)完掘・SI 1 (旧)床面検出状況 (東から)		2	SD 1 土層断面(東から)
	2	SI 1 完掘状況(東から)		3	SD 2 完掘状況(西から)
PL.31	1	SI 1 検出状況(北から)		4	自然流路完掘状況(南西から)
	2	SI 1 北西区遺物出土状況(北から)		PL.38	1 台形石器・尖頭器
	3	SI 1 東西ベルト土層断面 (西半：南西から)		2	石鏃・石錐(黒曜石)
	4	SI 1 南北ベルト土層断面 (北半：東から)		PL.39	1 スクレイパー・楔形石器・石核
	5	SI 1 焼土土層断面(東から)		2	楔形石器・石核・ブランク・剥片
	6	SI 1 (旧)中央ピット土層断面(東から)		PL.40	1 石鏃・石匙・剥片(安山岩)
PL.32	1	SS 1 床面検出状況(北から)		2	石錘
	2	SS 1 遺物出土状況(南東から)		PL.41	1 打製石斧
	3	SS 1 床面検出状況(南西から)		2	打製石斧・磨製石斧・砥石
	4	SS 1 土層断面(北側：北西から)		PL.42	1 磨石(1)
	5	SS 1 土層断面(南側：北西から)		2	磨石(2)
PL.33	1	SS 2 床面検出状況(南から)		3	磨石・敲石・石皿・台石
	2	SS 2 床面検出状況(北西から)		PL.43	1 台石
	3	SS 2 土層断面(南側：南西から)		2	3区出土土器(器台・低脚坏)
PL.34	1	SK11遺物出土状況(南西から)		3	1区II層出土土器
	2	SK11検出状況(南東から)		PL.44	1 SI 1 出土土器
	3	SK11完掘状況(南から)		2	SI 1 出土軽石
	4	SK11東西土層断面(南から)		3	SK11出土土器(1)
	5	SK11南北土層断面(東から)		4	SK11出土土器(2)
PL.35	1	SS 3 完掘状況(南から)		5	SI 1、SK 3、SK11ほか出土土器
	2	SS 3 東西ベルト土層断面(南東から)		PL.45	SS 1 出土土器
	3	SK12検出状況(南西から)		PL.46	自然流路出土土器
				PL.47	表土、I・II層出土土器
				PL.48	3区出土土器(壺・甕)

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

本調査は、平成21年度に一般国道9号名和淀江道路の改築に伴い実施した周知の埋蔵文化財包蔵地(以下遺跡)の本発掘調査である。本発掘調査を実施した遺跡は豊成上神原遺跡、豊成上金井谷峰遺跡(いずれも大山町豊成)である。

山陰地方では、国道9号線の交通混雑緩和、荒天時の交通障害解消、災害時の緊急輸送の代替道路確保及び将来の国土幹線道路整備として、山陰自動車の整備事業が進められ、鳥取県西部地域では、米子道路、名和淀江道路が自動車専用道路として一部供用されている。

このうち、大山町を通る名和淀江道路の計画地内及び隣接地には、多数の遺跡があり、建設に先立って計画地内の遺跡の有無・範囲・性格・内容等を確認する必要性が生じた。このため、平成2年度から大山町、名和町各教育委員会(いずれも当時)、平成19年度から大山町教育委員会によって、国庫補助事業として逐次試掘・確認調査が行われた。

試掘・確認調査の結果を受け、文化財保護法に基づく手続きを踏まえ、平成12年度から平成16年度にかけては、財団法人鳥取県教育文化財団が調査主体となり、安原溝尻遺跡など17箇所の遺跡の本発掘調査が行われた。また、平成17・18・20年度には鳥取県埋蔵文化財センターが調査主体となり、門前上屋敷遺跡など6箇所の遺跡の本発掘調査を行った。発掘調査終了後には各報告書が刊行されている。

平成21年度は、豊成上神原遺跡の一部及び豊成上金井谷峰遺跡他6遺跡が本発掘調査の対象となった。

参考文献

名和町教育委員会2000『名和町内遺跡分布調査報告書』名和町埋蔵文化財発掘調査報告書第26集

名和町教育委員会2004『名和町内遺跡発掘調査報告書』名和町文化財調査報告書第33集

大山町教育委員会1990『大山町内遺跡発掘調査報告書 安原所在遺跡・平第2遺跡』大山町埋蔵文化財調査報告書10



第1図 名和淀江道路関係遺跡位置図

第2節 調査の方法と経過

1 調査区の名称と調査方法

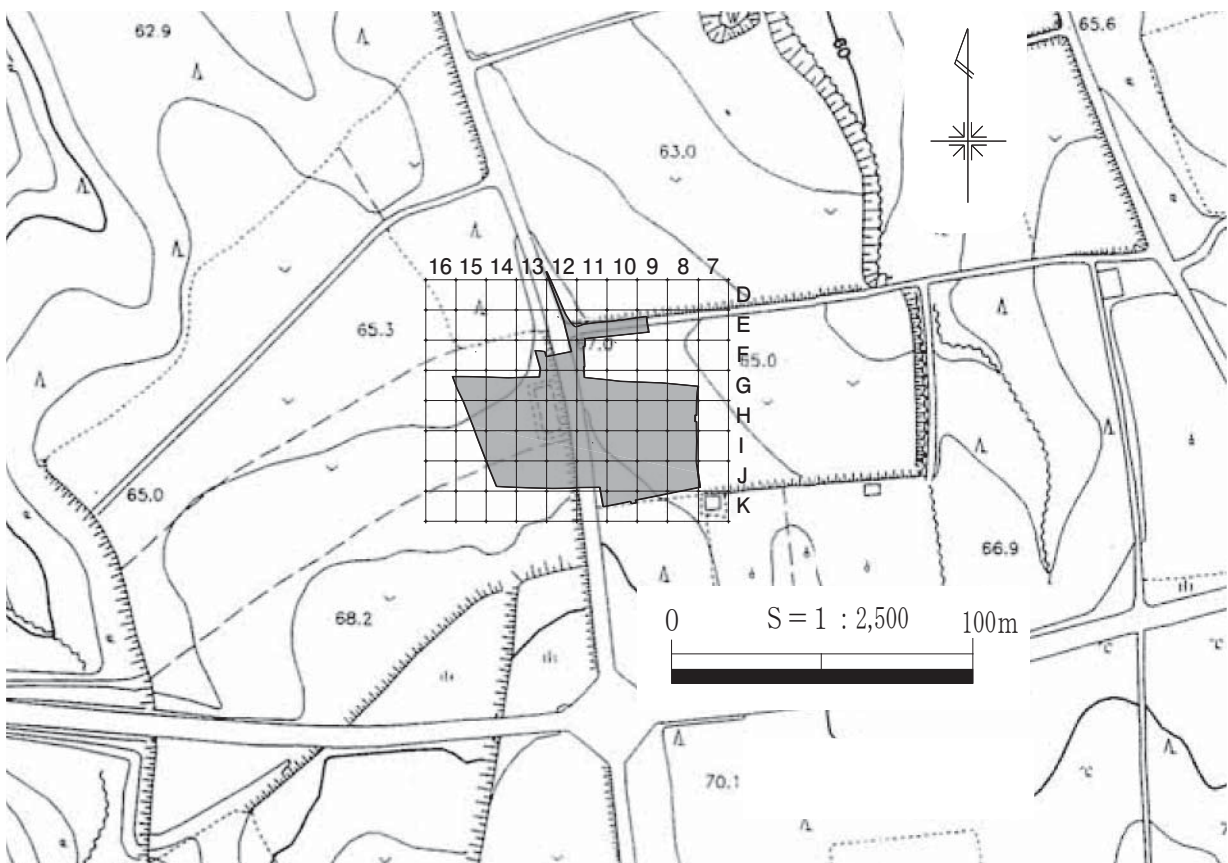
豊成上神原遺跡の調査前の状況は芝畑地である。調査に先立ち、世界測地系公共座標第V系に載るように調査区内に10m方眼の基準杭を設定し、グリッドを設けた。グリッド名は、東西南北軸交点の北東杭名を採り、I 15(X: -54280m、Y: -72100m)、K 10(X: -54300m、Y: -72050m)などとなった。標高値は、国土交通省が設置した2級基準点H18-2-3の71.771mを使用した。

豊成上金井谷峰遺跡の調査前の状況は山林である。調査に先立ち、世界測地系公共座標第V系に載るように調査区内に10m方眼の基準杭を設定し、グリッドを設けた。グリッド名は、東西南北軸交点の北東杭の名称を採り、G 3(X: -54280m、Y: -71510m)、F 22(X: -54270m、Y: -71700m)などとなった。標高値は、国土交通省が設置した2級基準点H18-2-2の68.675mを使用した。

いずれの遺跡の調査も、検出した遺構・遺物の記録には、光波トランシット及び自動レベルを用い、簡易遣り方測量及び光波トランシットによる座標測量を行った。現地での写真撮影は35mm判、ブローニー(6×7)判により、地上又は写真用足場上から行った。また、調査前状況及び調査後状況写真については、ラジコンヘリコプターからの空中写真撮影(ブローニー判カメラ使用)も併せて行った。遺物写真撮影は、ブローニー(6×7)判及び4×5判カメラを用いた。いずれも白黒ネガフィルム並びにカラーポジフィルムを使用し、適宜デジタルカメラも使用した。

2 豊成上神原遺跡の調査の経過

豊成上神原遺跡は、今年度調査地のほぼ中央を町道が通っており、東西に2分されている。調査は

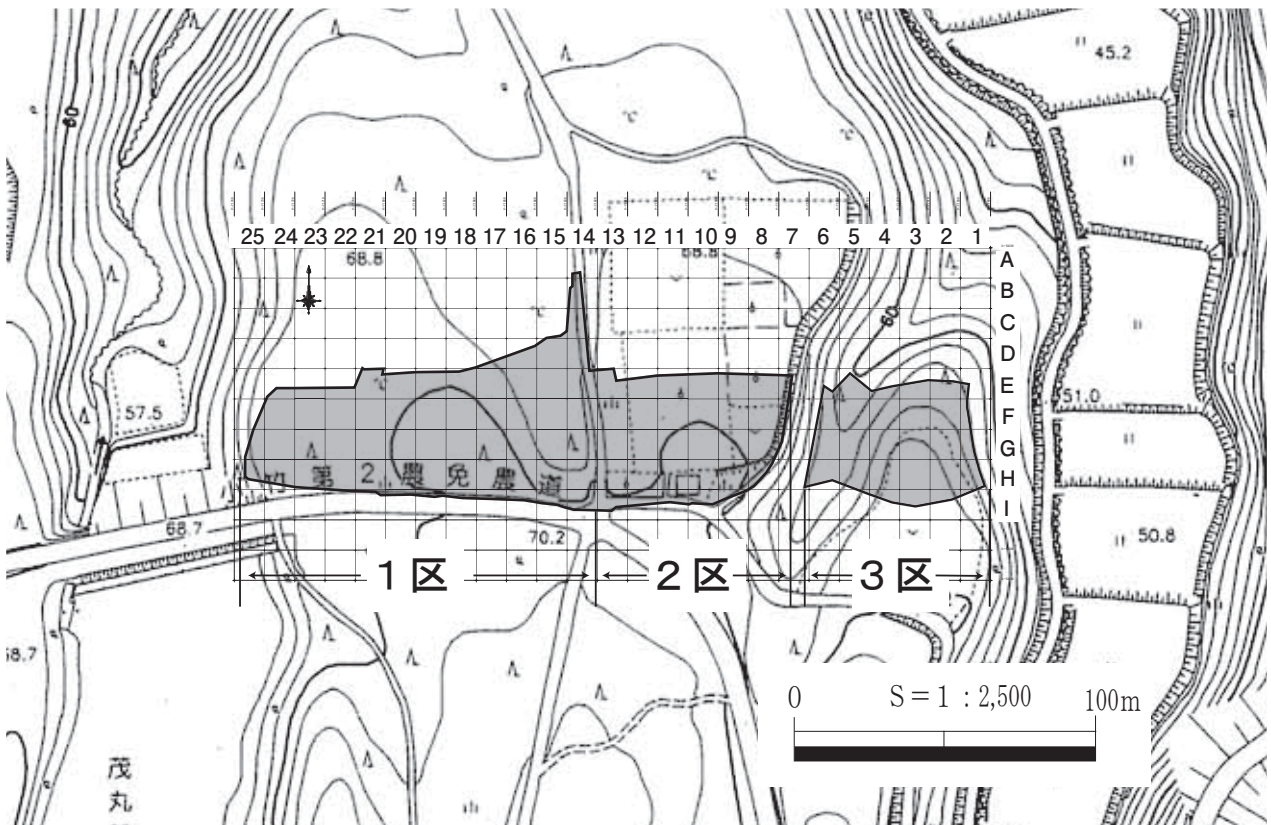


第2図 豊成上神原遺跡グリッド配置図

調査地東側、西側の順で行い、さらに東側は南北に、西側は町道部とそれ以外とに細分して順に調査した。また、東側調査時は西側を、西側調査時は東側を発掘作業員駐車場として用いた。調査は4月6日から7日に重機による表土剥ぎ作業後、4月16日から発掘作業員の稼働を開始し、6月23日まで検出・掘り下げを行った。また、4月17日から調査地東側の方眼杭の打設を実施した。その後9月17日から調査地西側の調査後地形測量を実施し、11月10日の調査後航空写真撮影をもってすべての発掘調査に係る作業を終了した。調査の結果、縄文時代の落とし穴7基等を検出した。調査対象面積は3,475㎡である。調査は森本・石原が担当した。

3 豊成上金井谷峰遺跡の調査の経過

豊成上金井谷峰遺跡の調査は、調査地を西から順に1～3区の3つに分け、一部重複しつつおおよそ1区、3区、2区の順に調査を行った。1・3区調査時は2区を、2区調査時は1区を発掘作業員駐車場として整備し、調査を行った。調査は4月6日から8日に重機による表土剥ぎ作業後、4月16日から発掘作業員の稼働を開始し、10月19日まで検出・掘り下げ作業を行った。また、4月17日から1・3区の方眼杭の打設を実施した。その後、10月26日から2・3区の調査後地形測量を実施し、11月10日の調査後航空写真撮影をもってすべての発掘調査に係る作業を終了した。調査の結果、縄文時代の落とし穴10基、弥生時代後期の竪穴住居跡1棟、古墳時代のテラス状遺構2基等を検出した。調査対象面積は9,211㎡である。調査は濱・濱本・油利・野島が担当した。



第3図 豊成上金井谷峰遺跡グリッド配置図

第3節 調査体制

下記の体制で発掘調査、報告書作成を行った。

鳥取県埋蔵文化財センター

所 長 久保 穰二郎
次 長 中尾 淳一（兼総務係長）
総 務 係
副 主 幹 福島 良
主 事 浜辺 奈都美

発掘事業室

室 長 山柝 雅美（兼調整係長）
調 整 係
発掘調査員 岩垣 命

調査担当（琴浦調査事務所）

副 主 幹 牧本 哲雄（総括責任者）
副 主 幹 濱 隆造（豊成上金井谷峰遺跡調査担当責任者）
文化財主事 森本 倫弘（豊成上神原遺跡調査担当責任者）、濱本 利幸、油利 崇、
野島 智実、石原 憲人

調査日誌抄

豊成上神原遺跡

1月16日 調査地東側調査前地形測量開始
3月11日 調査前航空写真撮影
4月6日 調査地東側表土剥ぎ開始
4月16日 発掘作業員稼働開始
4月17日 方眼測量開始
6月23日 調査地東側調査終了
7月27日 調査地西側造成土除去開始
9月17日 調査地西側調査後地形測量開始
10月29日 調査地西側掘り下げ作業終了
11月10日 調査後航空写真撮影

豊成上金井谷峰遺跡

1月16日 調査前地形測量開始
3月11日 調査前航空写真撮影
4月6日 1・3区表土剥ぎ開始
4月16日 発掘作業員稼働開始
4月17日 方眼測量開始
7月28日 1区調査終了
8月27日 2区表土剥ぎ開始
9月15日 竪穴住居跡検出写真撮影
9月16日 3区調査終了
10月19日 2区掘り下げ作業終了
10月26日 2・3区調査後地形測量開始
11月10日 調査後航空写真撮影



写真1 豊成上神原遺跡表土剥ぎ風景



写真2 豊成上金井谷峰遺跡SI1調査風景

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

豊成上神原遺跡、豊成上金井谷峰遺跡が所在する大山町は、鳥取県西部、西伯郡の北東部を占める位置にあり、県庁所在地の鳥取市からは西へ約60km、県西部中核都市の米子市に隣接する。町域は、南端の大山(1,729m)を頂点に、船上山(615m)から金屋付近の日本海に至る線を東辺とし、西辺は大山を頂点に下槇原・孝霊山(751m)を結び保田付近の日本海に至る、不整逆三角状に広がる形を呈す。東西約15km、南北約20km、総面積は約189.8km²を測り、人口は18,148人(平成23年2月)の農畜産漁業・観光を主な産業にする町である。

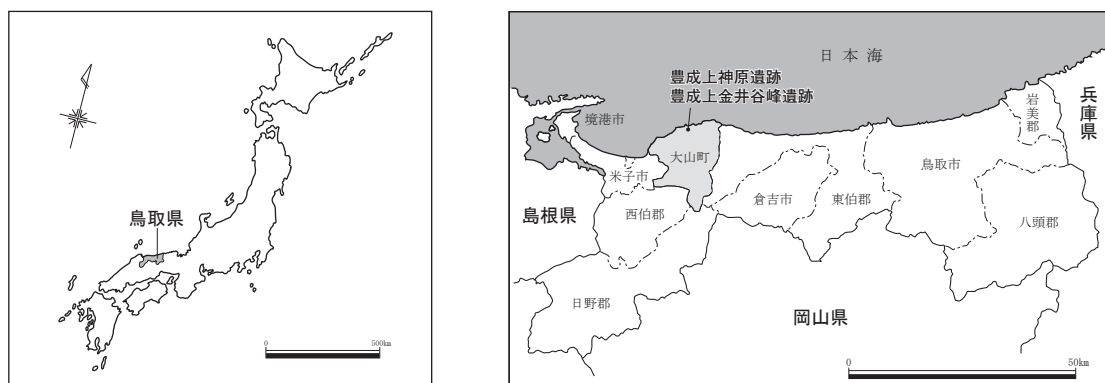
本町の地勢は、大山山系から放射状に流れる小河川により侵食され残った、手指状に延びる台地状の尾根と急峻な小溪谷が繰り返す火山性台地と、甲川、下市川、真子川、名和川、阿弥陀川流域に発達した平野部からなる。平野部は、肥沃な黒ボク地帯で、特に阿弥陀川流域は県内でも屈指の広さとなる扇状地を形成している。台地は、古期扇状地堆積物層上に主に大山テフラの堆積したもので、海岸線付近まで延びている。町内には、前述の大山山系に源流を発する河川の他、大小計12本の川が日本海に注いでいる。

豊成上神原遺跡・豊成上金井谷峰遺跡は、同町の東西ほぼ中央で農免農道沿いに位置し、海岸線から約1.8kmにある標高約64～69mの丘陵上に立地している。遺跡のある丘陵は大山から北に延びる尾根の裾にあたり、南北に走る小さな谷が存在する。両遺跡はこれらの丘陵を東西方向に横断するように広がっており、畑地・林地の中に位置している。

第2節 歴史的環境

大山町内では近年、山陰道関連の発掘調査をはじめ発掘調査が多数行われている。ここでは豊成上神原遺跡、豊成上金井谷峰遺跡の周辺である大山町の中央から東側に位置する、おおよそ旧名和町及び旧中山町に所在する遺跡について、時代ごとに概要を述べる。

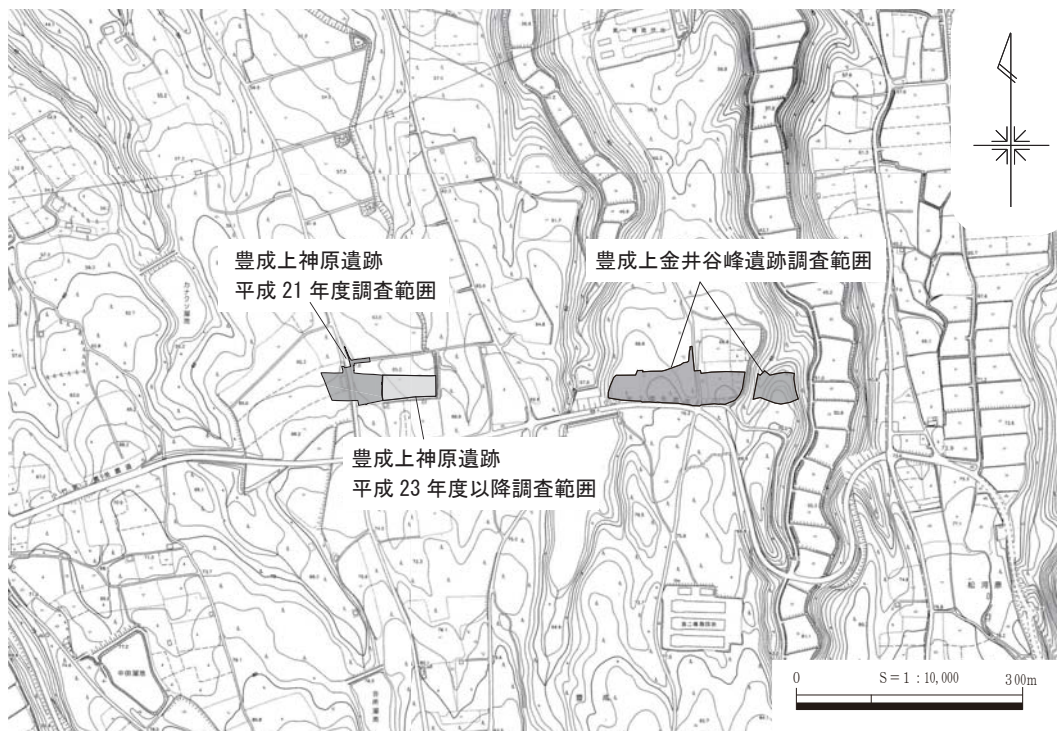
旧石器時代 近年大山山麓では、発掘調査によって後期旧石器遺物が確認されるようになった。門前第2遺跡(西畝地区)(107)では、AT火山灰層以下(25,000年以前)で黒曜石製ナイフ形石器・黒曜石剥片を含む石器群が確認されている。その他、出土層位は明確ではないが、名和小谷遺跡(113)では黒曜石製国府型ナイフ形石器が、押平尾無遺跡(103)では角錐状石器が出土している。



第4図 遺跡位置図

縄文時代 この地域は、県内においてもこの時期の遺跡が多数存在する地域である。退休寺、羽田井(萩原)、上大山、大仙道、陣構、坊領、荘田などでは、草創期と考えられる有茎尖頭器、局部磨製石斧等が表採されている。早期では、門前第2遺跡(菖蒲田地区)(107)で押型文土器とともに10基の配石群、名和飛田遺跡(110)では早期末から前期の土坑が検出されている他、遺構は伴わないが赤坂後口山遺跡(71)、退休寺飛渡り遺跡(75)、古御堂金蔵ヶ平遺跡(105)、上大山第1遺跡(36)、角塚遺跡(39)、高田第4遺跡(34)、蛇居谷遺跡、大道原遺跡、塚田遺跡、蔵岡第1遺跡(37)、茶畑山道遺跡(20)などで押型文土器等が出土している。前期では、石器工房と推定される下市築地ノ峯東通第2遺跡(60)、名和乙ヶ谷遺跡(111)で玦状耳飾が出土している。中期では、貯蔵穴が確認された細工塚遺跡(63)などがある。後期では、南川遺跡(9)で石組炉を備えた住居跡、晩期では、大塚第3遺跡(1)で住居跡が見ついている。その他、落とし穴が八重第3遺跡(91)、小松谷遺跡(68)、下甲抜堤遺跡(70)、赤坂後口山遺跡、門前上屋敷遺跡(109)、門前第2遺跡、小竹下宮尾遺跡(118)、西坪岩屋谷遺跡(115)など多数の遺跡で検出されており、狩猟場として丘陵・微高地縁辺部が利用された様子がうかがわれる。

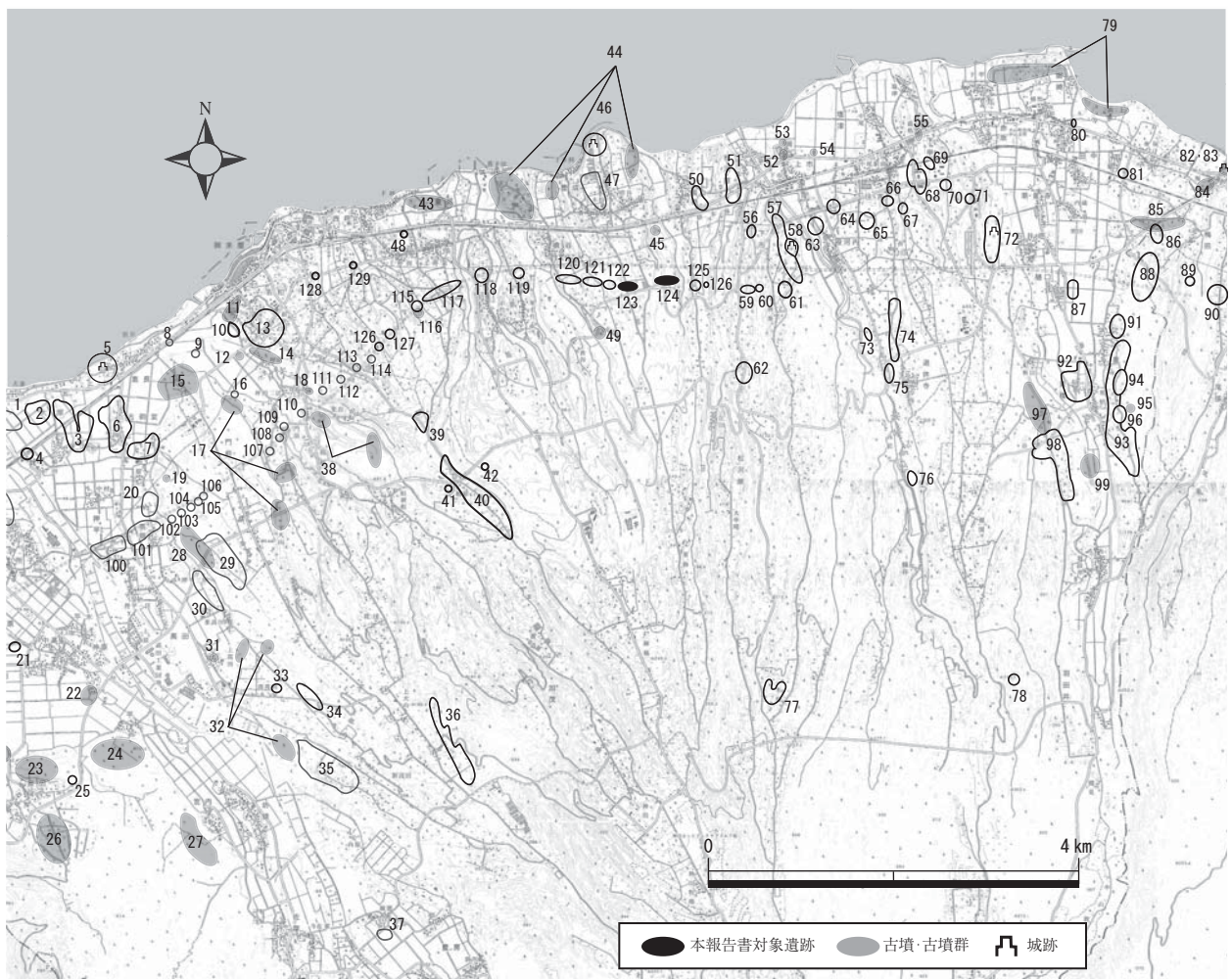
弥生時代 この地域では前期の遺構は少なく、大塚岩田遺跡(2)で環濠の可能性のある溝が検出されている他、樋口第1遺跡(87)、三谷遺跡(98)、などで土器が出土している程度である。中期になると遺跡数が増え、集落遺跡として細工塚遺跡、退休寺遺跡(74)、退休寺飛渡り遺跡、殿河内落合遺跡(73)、押平弘法堂遺跡(100)、名和飛田遺跡、門前上屋敷遺跡等が挙げられる。また、茶畑山道遺跡、茶畑第1遺跡(102)では独立棟持柱を備える大型掘立柱建物をもつ集落が検出され、当該地域の拠点的な集落と考えられている。後期には、退休寺遺跡、八重第3遺跡、大塚塚根遺跡(3)、押平尾無遺跡、茶畑第2遺跡(29)、茶畑六反田遺跡(101)、茶畑第1遺跡、東高田遺跡(30)、小竹下宮尾遺跡など丘陵上に集落遺跡が多数造営される。その中で、複数の丘陵上に展開する国史跡妻木晩田遺跡は、弥生時代中期以降夥しい数の住居・倉庫、四隅突出型墳丘墓、環濠などが作られるなど、集落研究にとっ



第5図 調査位置図

て重要な遺跡である。当該期には、松尾頭地区において、首長居宅と考えられる竪穴住居跡と近接して祭殿と考えられる二面庇の高床建物跡も確認されている。終末期の墳墓としては、徳楽方墳(25)、松尾頭1・2号墓、門前1号墓(107)がある。

古墳時代 当該地域では、各時期において前方後円墳は確認されていない。前期では、小規模な方墳が茶畑第1遺跡で確認されているにすぎない。当該地域の古墳は、ほとんどが中期から後期にかけてのものであるが、中期のものうち、高塚古墳(54)、ハンボ塚古墳(12)は、葺石・埴輪などの外表施設を持つ大型円墳で、首長墳の内容を持つ。後期になると御崎古墳群(79)、東積古墳群(99)、三谷古墳群(97)、高田古墳群(32)、門前古墳群(17)、豊成古墳群(44)、坪田古墳群(14)、富長山村古墳群(15)、蔵岡古墳群、宮内古墳群(27)、平古墳群(24)などが形成されている。このうち、御崎古墳群では塊石を用いた箱式石棺を有し、鳥取県中部地域に特徴的に見られる壺型埴輪が出土しており、他地域との交流がうかがわれる。また、岩屋堂古墳(52)、長野2号墳、岩屋平ル古墳(95)、三谷16号墳、東積11号墳、高田26・27号墳(31)、茶畑12号墳、豊成28号墳(45)、宮内1・2号墳、平狐塚古墳など切石積



1. 大塚第3遺跡、2. 大塚岩田遺跡、3. 大塚塚遺跡、4. 大塚屋敷遺跡、5. 富長城跡、6. 古御堂遺跡、7. 文殊領屋敷遺跡、8. 荒田遺跡、9. 南川遺跡、10. 馬郡遺跡、11. 名和公園裏古墳群、12. ハンボ塚古墳、13. 長者原遺跡、14. 坪田古墳群、15. 富長山村古墳群、16. 門前礎石群、17. 門前古墳群、18. 長綱時古墳群、19. 原3号墳、20. 茶畑山道遺跡、21. 清原遺跡、22. 中高遺跡、23. 長田古墳群、24. 平古墳群、25. 徳楽方墳、26. 源平山古墳群、27. 宮内古墳群、28. 茶畑古墳群、29. 茶畑第2遺跡、30. 東高田遺跡、31. 高田26号墳、32. 高田古墳群、33. 高田原廃寺、34. 高田第4遺跡、35. 高田第10遺跡、36. 上大山第1遺跡、37. 蔵岡第1遺跡、38. 鹿原古墳群、39. 角塚遺跡、40. 柳原遺跡、42. 上寺谷たたら、43. 東坪古墳群、44. 豊成古墳群、45. 豊成28号墳、46. 長野城跡、47. 浜ノ坂遺跡、48. 龍光寺掘遺跡、49. 倉谷横穴墓、50. 松河原第1遺跡、51. 松河原第2遺跡、52. 岩屋堂古墳(岡古墳)、53. 岡3号古墳、54. 高塚古墳、55. 曲松古墳群、56. 築地峯東通遺跡、57. 林之峯東通遺跡、58. 天守山遺跡、59. 下市築地ノ峯東通第3遺跡、60. 下市築地ノ峯東通第2遺跡、61. 要害ノ峯遺跡、62. 築地ノ峰第3遺跡、63. 細工塚遺跡、64. 向畑遺跡、65. 住吉第4遺跡、66. 住吉第1遺跡、67. 住吉第2遺跡、68. 小松谷遺跡、69. 林之峯遺跡、70. 下甲坂堤遺跡、71. 赤坂後口山遺跡、72. 岩井垣遺跡、73. 殿河内落合遺跡、74. 退休寺遺跡、75. 退休寺飛渡り遺跡、76. 退休寺第1遺跡、77. 二本松遺跡、78. 羽田井遺跡、79. 御崎古墳群、80. 御崎第2遺跡、81. 田中川上遺跡、82. 籠津城、83. 籠津古墳群、84. 坂ノ上古墳群、85. 梅田(栄田)古墳群、86. 梅田六ツ塚遺跡、87. 樋口第1遺跡(樋口遺跡)、88. 梅田宮峯遺跡、89. 梅田東前谷中峯遺跡、90. 籠津乳母ヶ谷第2遺跡、91. 八重第3遺跡、92. 樋口第2遺跡、93. 八重第4遺跡、94. 八重第1遺跡、95. 岩屋平ル古墳、96. 八重第2遺跡、97. 三谷古墳群、98. 三谷遺跡、99. 東積古墳群、100. 押平弘法堂遺跡、101. 茶畑六反田遺跡、102. 茶畑第1遺跡、103. 押平尾無遺跡、104. 古御堂笹尾山遺跡、105. 古御堂金蔵ヶ平遺跡、106. 古御堂新林遺跡、107. 門前第2遺跡、108. 門前鎮守山城跡、109. 門前上屋敷遺跡、110. 名和飛田遺跡、111. 名和乙ヶ谷遺跡、112. 名和衣装谷遺跡、113. 名和小谷遺跡、114. 名和中畷遺跡、115. 西坪岩屋谷遺跡、116. 西坪岩屋谷古墳、117. 東坪中林遺跡、118. 小竹下宮尾遺跡、119. 小竹上鷹ノ尾遺跡、120. 倉谷西中田遺跡、121. 倉谷荒田遺跡、122. 豊成叶林遺跡、123. 豊成上神原遺跡、124. 豊成上金井谷峰遺跡、125. 松河原上奥田第2遺跡、126. 松河原上奥田第3遺跡

第6図 周辺遺跡分布図

み横穴式石室をもつものがあり、米子市淀江町域までの同一文化圏を形成している。また、高田25号墳は、横穴式石室内に家形石棺を内包する。当地域は豊成横穴群など横穴群も形成されている。この時代の集落は、依然丘陵上に営まれる傾向が強く、前期の茶畑第1遺跡、中期から後期の押平尾無遺跡、古御堂笹尾山遺跡(104)、名和中畝遺跡(114)、大塚塚根遺跡、仁王堂遺跡、住吉第2遺跡(67)などがある。名和川の河岸段丘上には名和飛田遺跡、門前上屋敷遺跡がある。

古代 7世紀後半以降、山陰地方で仏教文化受容の痕跡が認められる。現在県内では22ヵ所の古代寺院が見つかっており、当該地域では高田原廃寺(33)がある。ここでは、乱石積基壇や溝状遺構が検出され、上淀廃寺式の単弁十二葉蓮華文軒丸瓦が出土している。その他、名和神社付近の長者原遺跡(13)が、『延喜式』に記載された古代山陰道の和奈駅(奈和の誤記か)として推定されている他、礎石建物、区画溝、大量の炭化米がみつまっていることから、^{あせり}汗入郡の正倉とも推定されているがいずれも明確ではない。大塚屋敷遺跡(4)では、倉庫群と考えられる掘立柱建物跡群が見つまっている。柘原窯跡(41)は須恵器窯と考えられるが、上寺谷たたら(42)の製鉄炉やその周辺での鉄滓表採事例などから、炭窯の可能性も指摘されている。細工塚遺跡では大型の掘立柱建物跡群が検出され、平安時代の官衙関連遺構や有力層の建物と想定されている。名和衣装谷遺跡(112)では2棟の大型掘立柱建物跡や鉄滓、緑釉・灰釉陶器が見つかっており、郡司層の居宅又は郡衙下部の鉄生産に関わる遺構と考えられている。茶畑六反田遺跡では、条里区画の一部と見られる溝が検出され、緑釉陶器や墨書土器が出土している。名和乙ヶ谷遺跡、小竹下宮尾遺跡では道路状遺構が検出されている。また、大山寺は、密教隆盛とともに信仰の中心的な役割を果たし、地方豪族に並ぶ僧兵勢力を有すようになる。なお、当該地域の古代の行政区画は、汗入郡^{つかづみ}東積郷、汗入郷、^{さかと}奈和郷、^{たかすみ}尺度郷、高住郷に属する。

中世 律令体制の崩壊とともに封建制社会が形成される。門前上屋敷遺跡では、中世の田畠跡の他、屋敷地を区画すると考えられる大溝、貿易陶磁が検出されている他、大規模な造成が認められ、居館又は寺院跡の指摘もある。門前礎石群は、青白磁・染付などの出土から中世以降の礎石建物跡と考えられる。旧名和町域には名和氏一族に関わるとされる旧跡が各所に見られる。その他、篁津豊後守敦忠の居城とされる石井垣城(72)、天守山城、香原山城、松尾城などの他、富長城(5)、長野城(46)、末吉城、福尾城など日本海沿岸部にも多く砦跡が築かれている。門前鎮守山城跡(108)では、大規模な土塁・堀切が検出された。門前第2遺跡では、中世から近世・近代にかけての大規模な墓地が形成されている。

近世 寛永9(1632)年に池田光仲が鳥取藩主となり、因伯は幕末まで池田氏の治世となる。この時代、御来屋は伯耆街道の宿駅、藩の運上米の積出港として重要な位置を占めた。

豊成上神原遺跡・豊成上金井谷峰遺跡の調査は、大山裾野に縄文時代の狩猟場として一例を加えるほか、本遺跡周辺に弥生時代の集落が営まれ、それ以後も古墳時代～古代にかけて近隣に遺跡が所在することを示唆するものといえるだろう。

【参考文献】

- 名和町誌編纂委員会編 1978『名和町誌』名和町
- 鳥取県埋蔵文化財センター 1986『鳥取県の古墳』
- 鳥取県埋蔵文化財センター 1988『旧石器・縄文時代の鳥取県』
- 鳥取県埋蔵文化財センター 1989『歴史時代の鳥取県』
- 内藤正中・真田廣幸・日置桑左エ門著 1997『県史31 鳥取県の歴史』(株)山川出版社
- 鳥取県教育委員会 2004『鳥取県中世城館分布調査報告書』第2集(伯耆編)
- 中山町誌編集委員会編 2009『新修中山町誌』大山町
- 発掘調査報告書類については割愛させていただいた。

第3章 豊成上神原遺跡の調査

第1節 遺跡の立地と層序

1 遺跡の立地(第7図、巻頭図版1、PL.1)

豊成上神原遺跡は、大山北麓から派生する、日本海へ向けて緩やかに傾斜する丘陵上に位置する。調査地の標高は63.50~68.00mである。丘陵一帯を縫うように大小の谷があり、丘陵の東側、および西側は谷地形となっている。

調査前の状況は芝畑として利用され、調査地中央部を南北に町道が通る。調査地東側、および西側は本来小規模な谷地形であるが、削平、盛土による造成がなされ、比較的平坦な地形に改変されていた。また、調査地北側は段状に削平されていた。

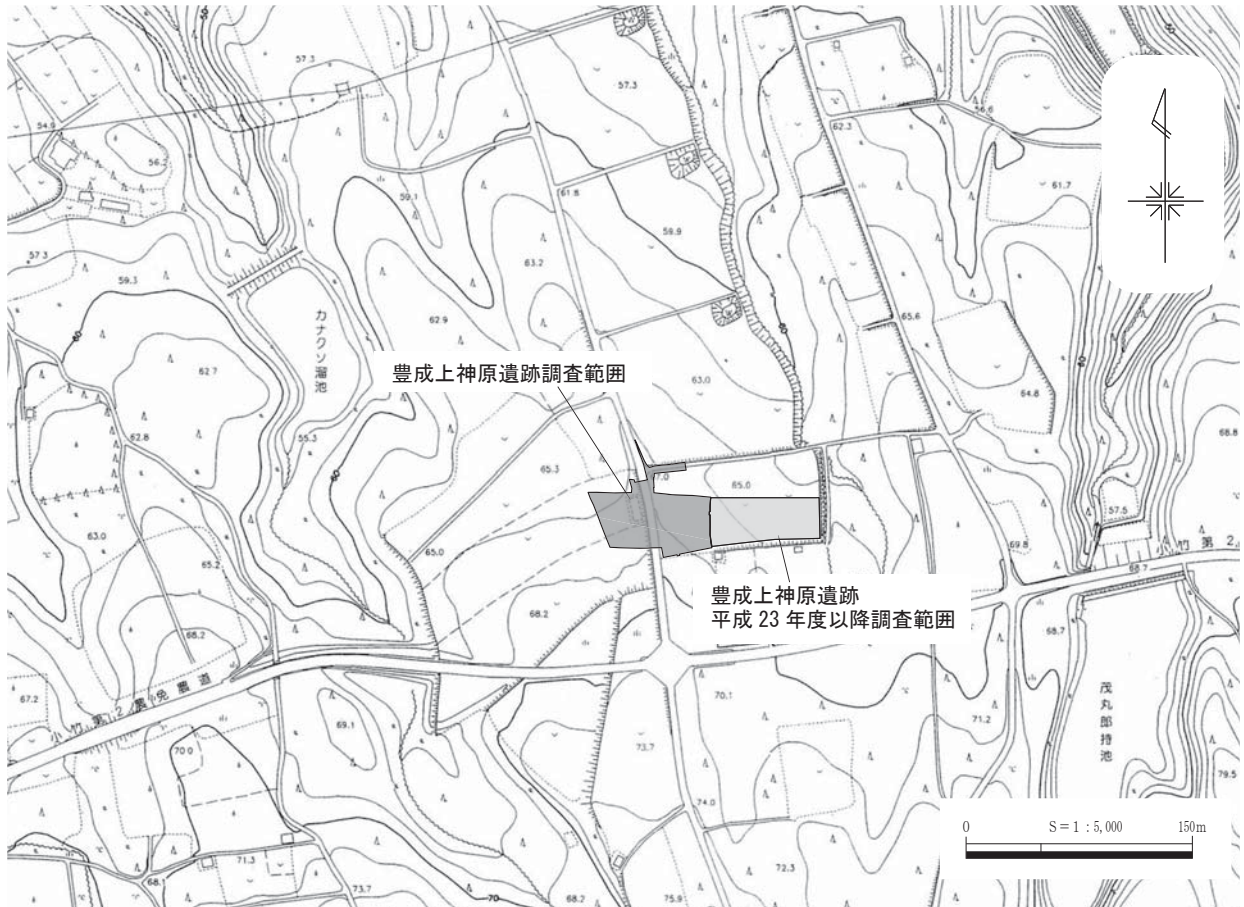
2 調査地内の土層堆積(第8図、PL.7)

調査地内の堆積については、調査地西壁面、調査地北壁、I12グリッドにトレンチを設定したほか、SK7の壁面を利用し、基本層序の記録を行った。以下、その概要を述べる。

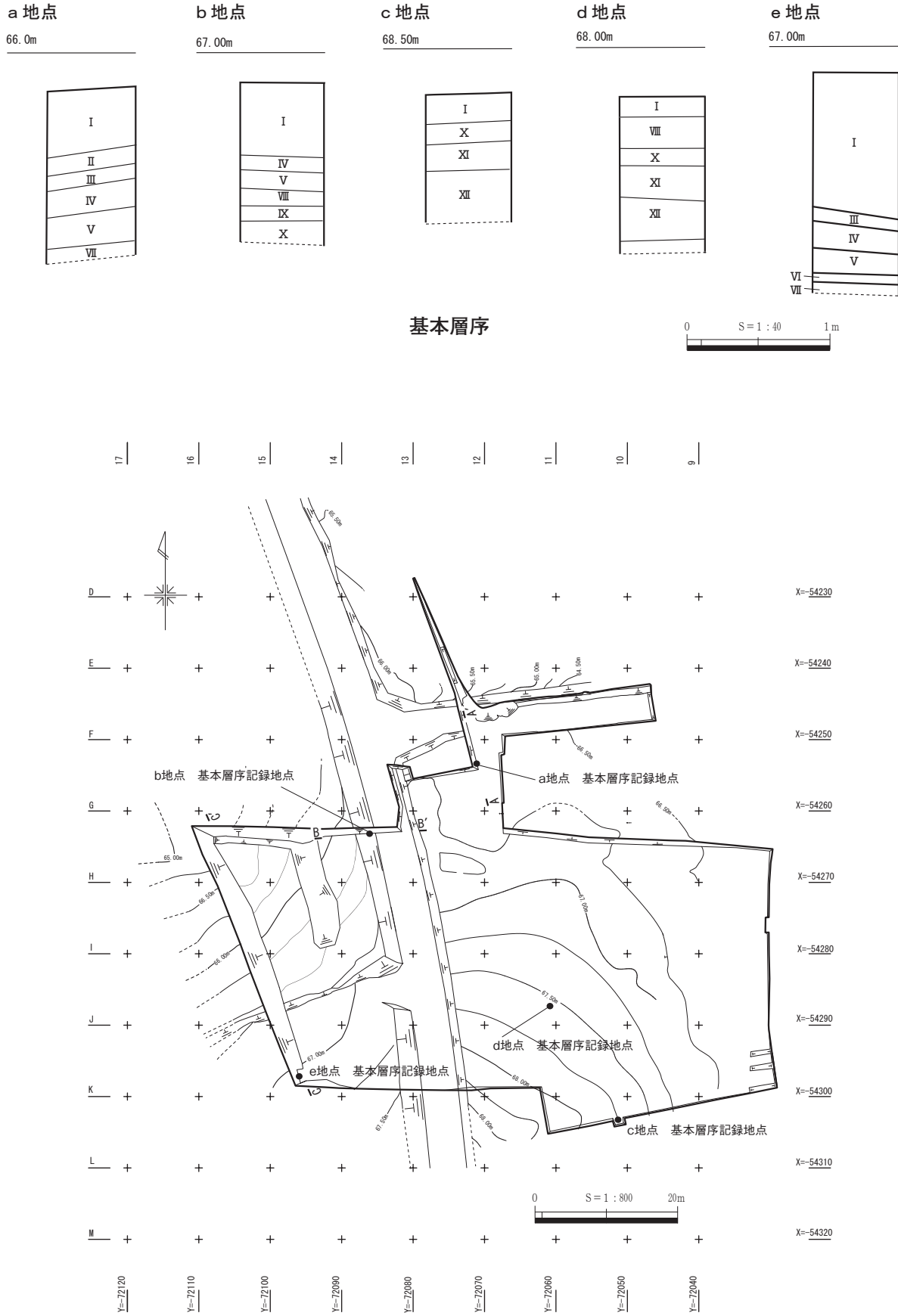
I層：表土。耕作土および造成土などからなる堆積である。

II層：灰黄褐色土(10YR4/2)。遺物の出土が認められず、土壌化が進んでいる。

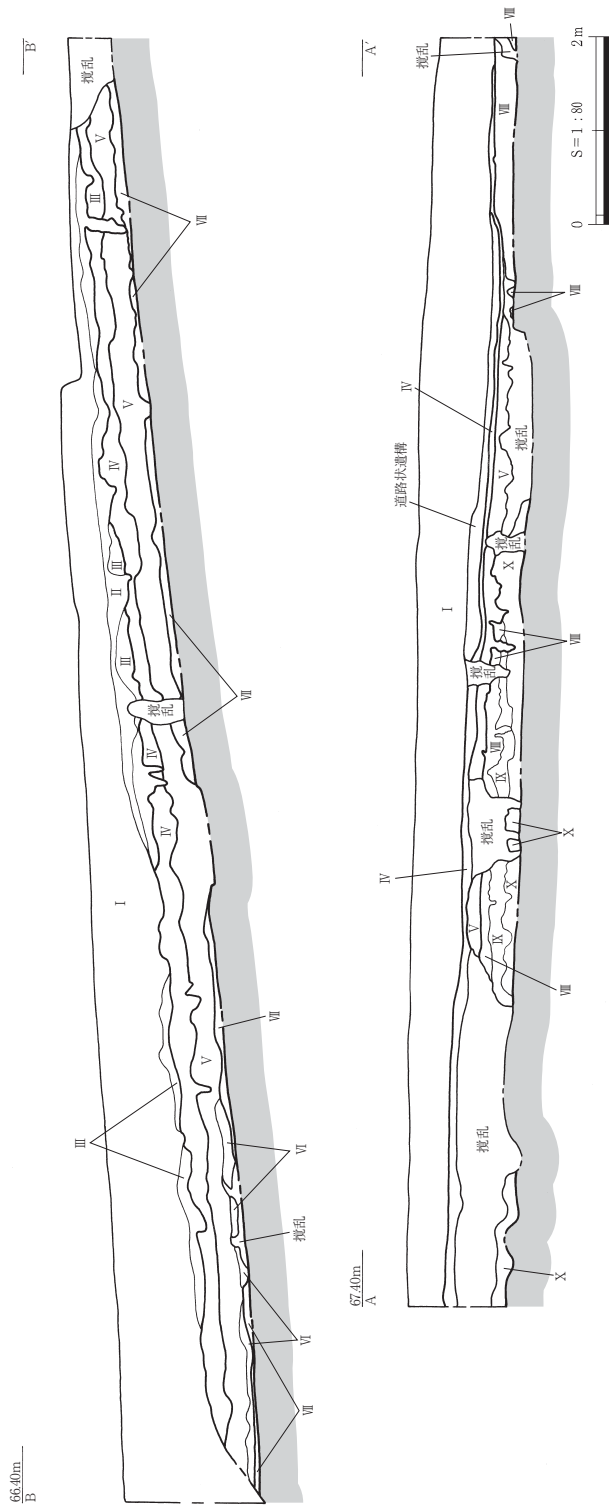
III層：暗褐色土(10YR3/3)。古代の遺物包含層である。調査地北西側斜面部に最大15cmの厚みを



第7図 調査地周辺の地形



第8図 調査地基本層序および調査前地形測量図



第9図 調査地土層断面図(1)

IX層：黄橙色土(10YR7/6)。大山上部火山灰であるホーキ層、もしくは始良Tn火山灰(AT)に由来する二次堆積と考えられる。

X層：明黄褐色土(2.5Y7/6)。始良Tn火山灰(AT)に由来する二次堆積と考えられる。

XI層：浅黄橙色土(10YR8/4)。乳白色を呈するローム層。粘性が強い。

XII層：明赤褐色土(5YR5/6)。粘性が強く、硬く締まるローム層。

XIII層：橙色土(5YR6/6)粘性が強く、硬く締まるローム層。XII層より、やや淡い色調を呈す。

もって堆積する。

IV層：褐色土(10YR4/6)。調査地北西側斜面部・北側平坦面に堆積する。古代のものとみられる鉄滓が出土した。北西側斜面部はIII層下に最大30cmの厚みで堆積する。北側平坦面は当層まで削平がおよび、約10cmの厚みをもって堆積する。当層上面においてSK10、道路状遺構を検出した。

V層：黒褐色土(10YR3/1)。調査地北西側斜面部・北側平坦面、南東側斜面部に堆積する。北西側斜面部はIV層下に最大35cmの厚みで堆積する。北側平坦面はIV層下に最大15cmの厚みをもって堆積する。南東側斜面部では、削平され遺存状態は悪いものの、当層が堆積することを確認した。当層上面にて、SK8・9・12、SD1を検出した。当層を含め、これより下層の堆積は無遺物層となる。なお、当層が堆積しない調査地南東側の平坦面で検出したSK3・5～7は、当層に由来するとみられる黒褐色土を埋土に含む。よって、後世に失われたものの、本来的には調査地内のほぼ全域に当層が堆積していた可能性が高い。

VI層：褐灰色土(10YR4/1)。調査地北西側斜面部に最大14cmの厚みをもって堆積する。

VII層：にぶい黄橙色土(10YR6/4)。ローム漸移層。北西側斜面部に堆積する。

VIII層：明褐色土(7.5YR5/6)。ソフトローム層である。調査地は削平されており、調査地南東側は主に当層上面で遺構を検出した。



第10図 調査地土層断面図(2)

第2節 調査の概要

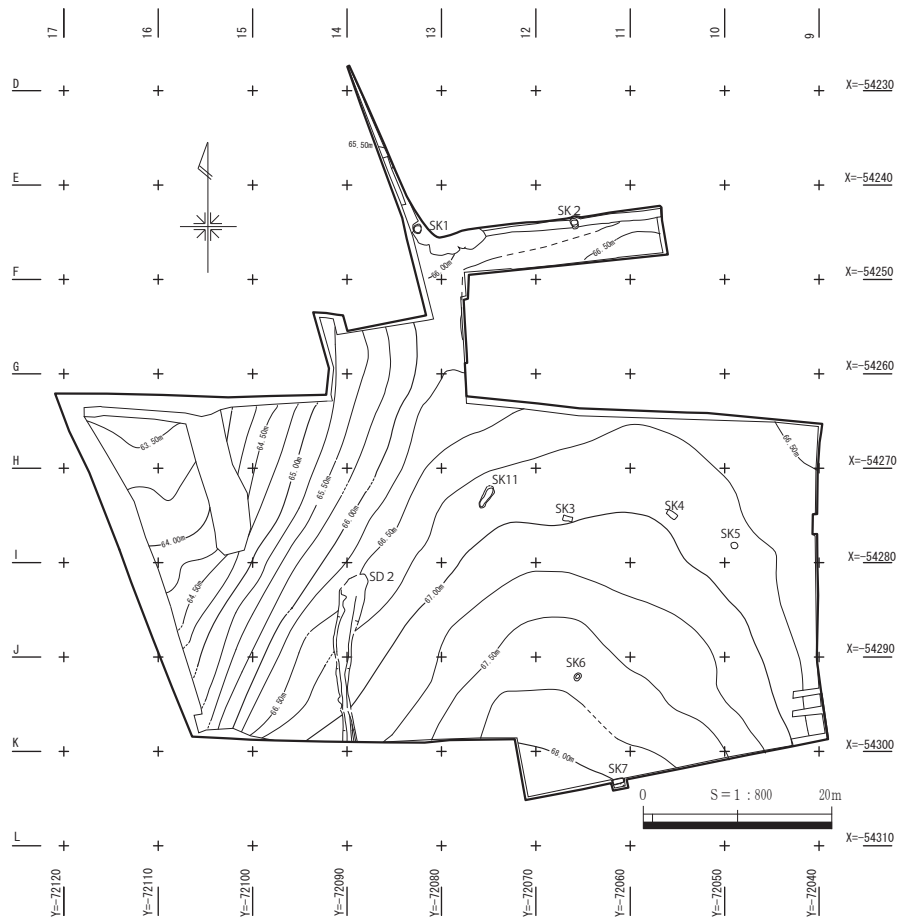
調査の結果、褐色土(Ⅳ層)、黒褐色土(Ⅴ層)、ローム層(Ⅷ層)上面の3面において、遺構を検出した。また古代の包含層(Ⅲ層及びⅣ層)2層を確認した。調査地周辺は圃場整備とみられる土地造成により地形が大きく改変され、各遺構面とも後世の影響が及んでいる。

ローム層(Ⅷ層)上面において検出した遺構の中には、埋土にⅤ層由来とみられる黒褐色土が堆積するもの(SK3～7、SD2)がある。これらの遺構の存在は、現在Ⅴ層が残存しない範囲においても、Ⅴ層が堆積していたことを示し、さらに本来の検出面がⅤ層上面となる可能性を示唆している。

遺構は、溝2条、土坑12基、道路状遺構1条を検出した。全体的に遺構密度、遺物量共に希薄であった。遺構名称については調査時と報告時が異なるため、凡例の表1に対照一覧を示した。

検出した2条の溝は、いずれも地形の傾斜変換点に位置する溝である。流水の痕跡はうかがえず、区画溝と考える。土坑は、古代の撓み状の遺構(SK10)、製炭土坑(SK8)のほか、縄文時代のものと考えられる落とし穴状の土坑(SK1～7)などを検出した。

調査地内から出土した遺物としては、土器では土師器・須恵器がある。土師器と須恵器は主に古代に帰属するものである。また少量ながら、古代の流動滓・鉄滓などの鉄関連遺物、縄文時代とみられる安山岩製の石鏃も出土した。



第11図 調査後地形測量図

第3章 豊成上神原遺跡の調査



第12図 V層上面地形測量図



第13図 IV層上面地形測量図

第3節 縄文時代の調査

1 概要

調査地平坦面から緩斜面にかけて、土坑7基を検出した。いずれもローム層(Ⅷ層)上面にて検出し、遺物は出土していないが、平面的な形態から落とし穴と考え、帰属する時期を縄文時代とした。平面形は円形のもの(SK1・2・5・6)と、長方形を呈するもの(SK3・4・7)に大別できる。

なお、攪乱土中より縄文時代の安山岩製の石鏃が1点出土している。

2 土坑

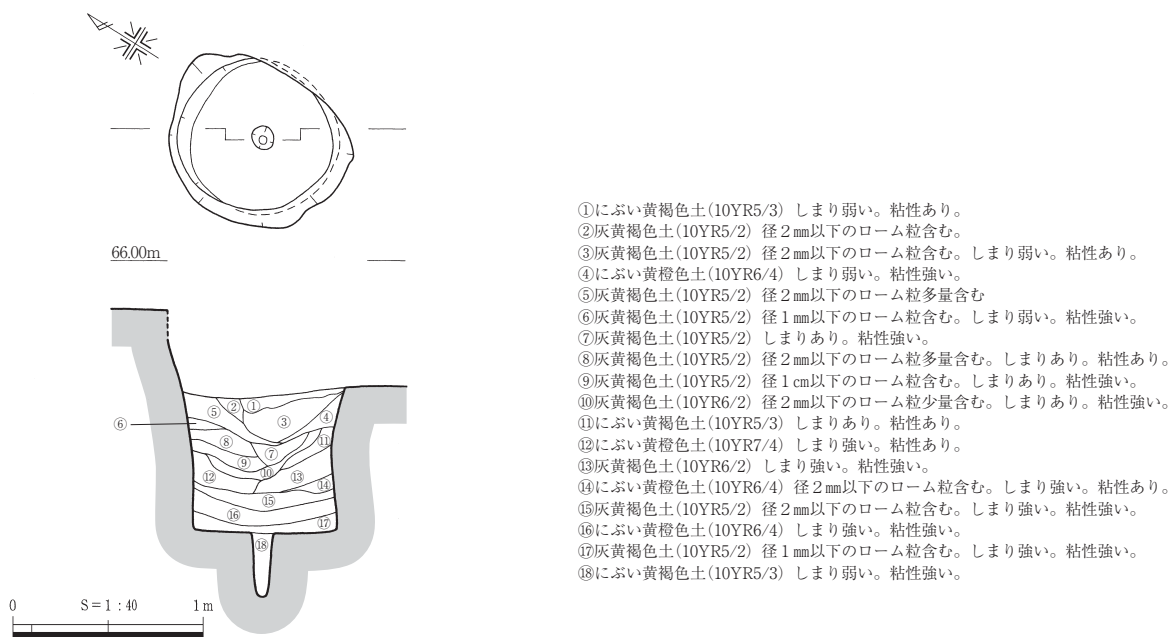
SK1 (第14図、PL.8)

E13グリッド、調査地北西向き斜面の標高65.70mに位置する。遺構はⅠ層下、ローム層(Ⅷ層)上面で検出した。平面形は円形を呈し、遺構上部は大きく攪乱を受けている。規模は検出面で南北1.01m、東西0.82m、深さ1.18mを測る。土坑断面は、やや袋状の形態をなす。床面は平らである。底面中央には円形で直径12cm、深さ36cmを測るピット1基を検出した。埋土は18層に分層でき、褐灰色土と地山ブロックを含む土が交互に堆積していることから自然な堆積状況がうかがえる。

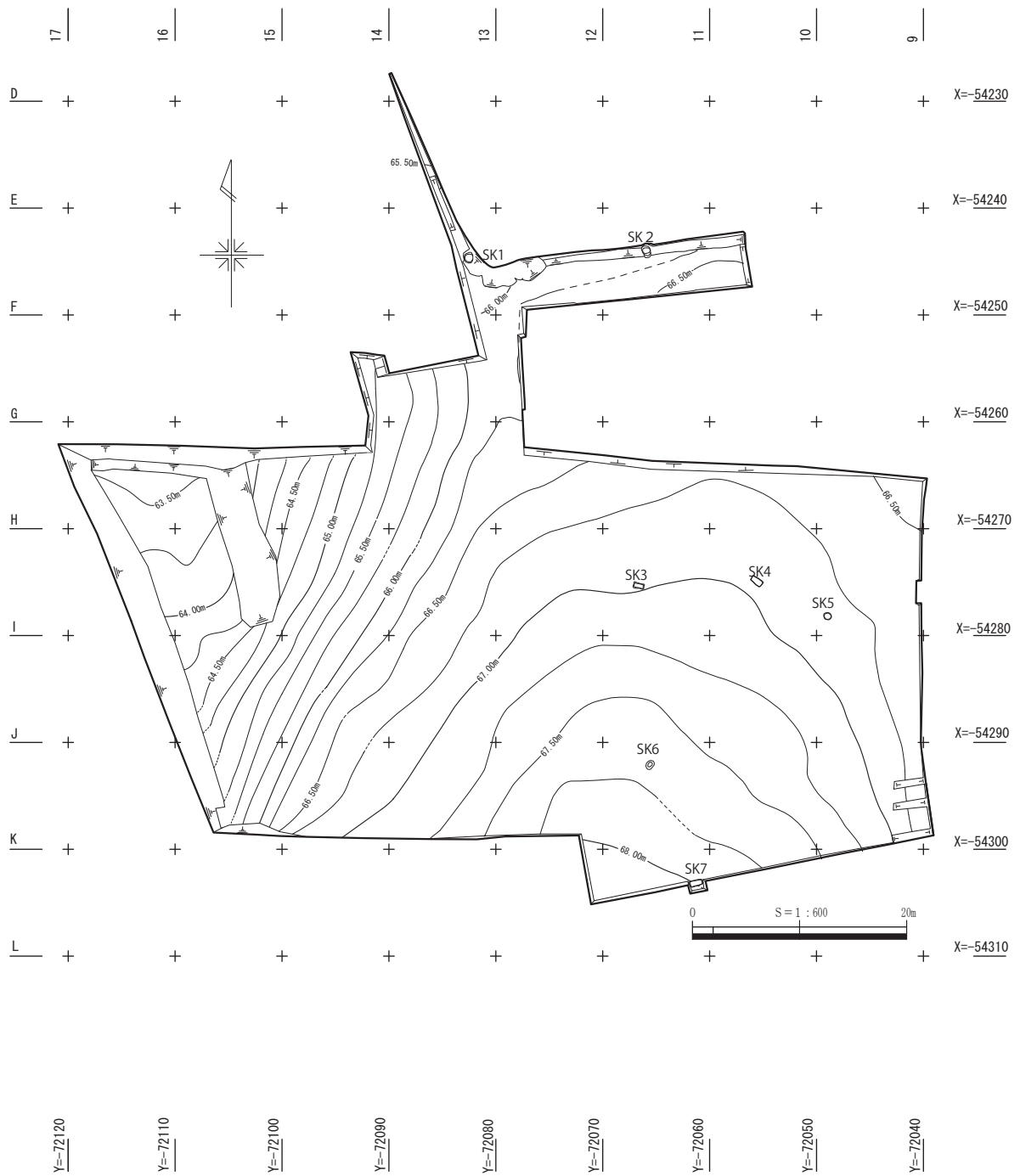
遺物は出土していない。形態的特徴から本遺構は落とし穴であると考えられる。

SK2 (第16図、PL.7)

E11グリッド、調査地北側緩斜面に位置する。ローム層(Ⅷ層)上面で検出し、遺構上部の大半は削平される。平面形は円形を呈し、検出面での規模は長軸1.12m、短軸0.76m、検出面からの深さは1.56mを測る。底面にピットは存在しない。埋土は褐灰色土とにぶい黄橙色土からなり、遺構周囲からの流入と、遺構壁面からの崩落による堆積とみられる。形態的な特徴から、落とし穴と考える。遺物は出土していない。



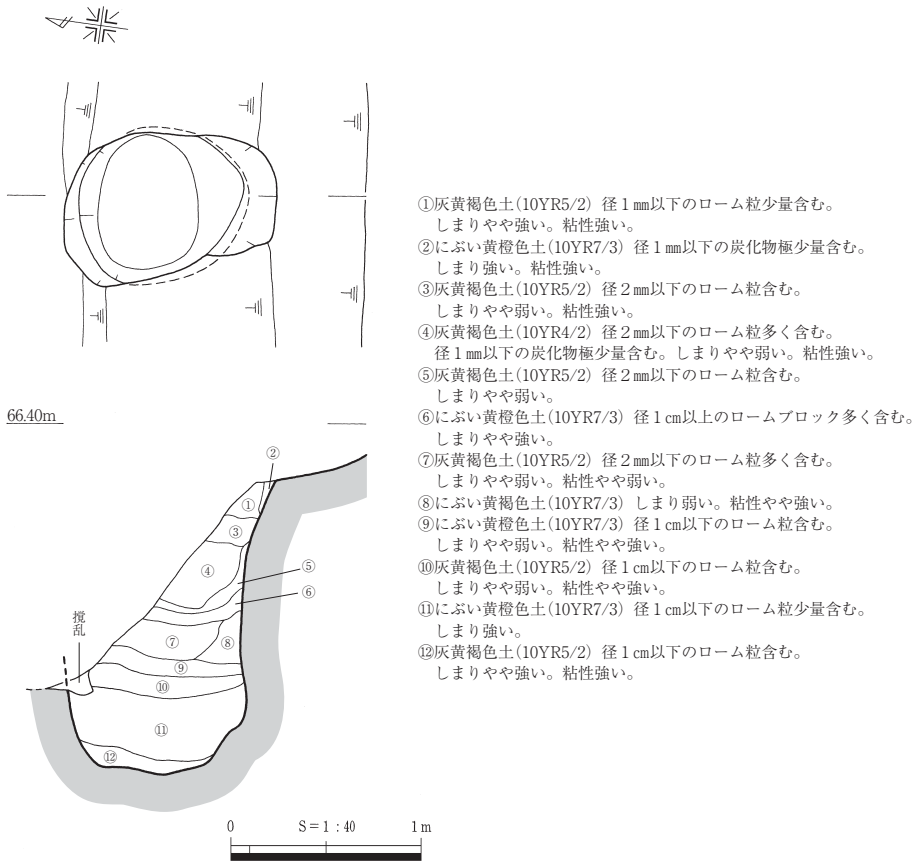
第14図 SK1



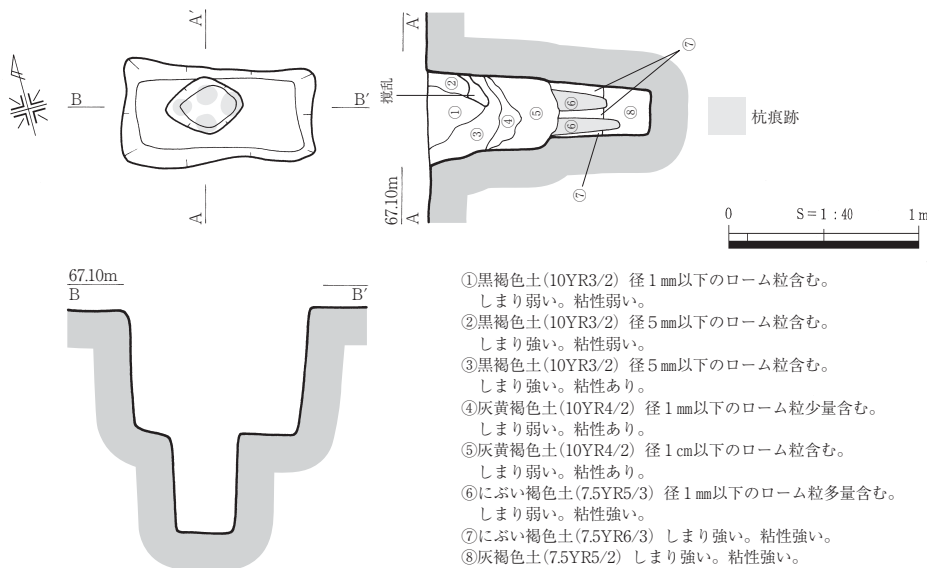
第15図 縄文時代遺構配置図

SK3 (第17図、PL.8)

H11グリッド、調査地中央平坦面の標高66.90mに位置する。遺構はI層下、ローム層(VIII層)上面で検出した。平面形は長方形で東西1.00m、南北0.49m、深さ0.69mを測る。底面中央部に菱形状を呈するピットを検出した。規模は30cm×41cm、深さ53cmを測る。ピット内には、円形で直径9cmから12cmの小ピットを4基検出した(⑥層)。深さは最大36cmから最小27cmを測る。菱形のピットを埋め戻し、



第16図 SK2

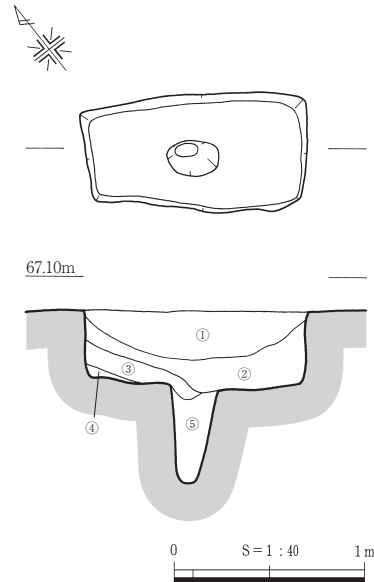


第17図 SK3

逆茂木とみられる4本の杭を固定したと考えられる。埋土は8層で黒褐色土を主体としている。①～⑤層までは自然な堆積状況がうかがえるが、⑦・⑧層はしまりが強く人為的な埋め戻しと考える。遺物は出土していない。形態的特徴から落とし穴と考えられる。

SK4 (第18図、PL.9)

H10グリッド、調査地東側平坦面に位置する。ローム層(Ⅷ層)上面で検出し、平面形は長方形を呈す。検出面での規模は長軸1.17m、短軸0.61m、検出面からの深さは0.42mを測る。底面中央には、ピット1基を検出した。ピットの規模は長軸27cm、短軸20cm、底面からの深さは49cmを測る。埋土は5層に分層でき、黒褐色土とにぶい黄褐色土が堆積する。形態的な特徴から、落とし穴と考える。遺物は出土していない。

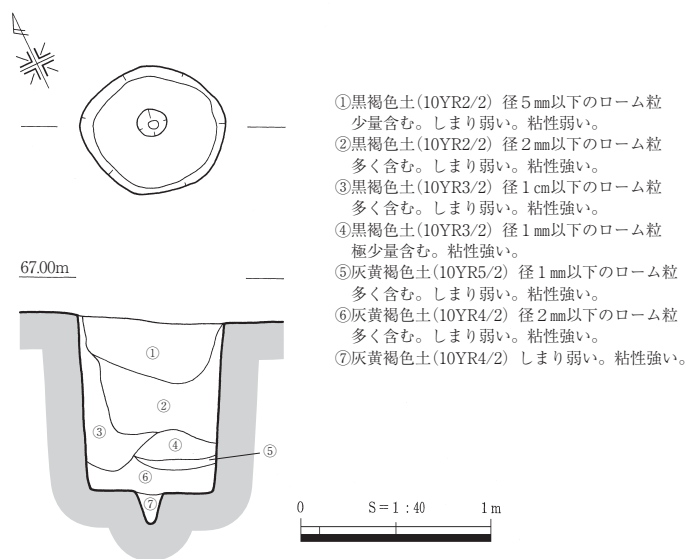


- ①黒褐色土(10YR3/1) 径1cm以下のローム粒含む。径1mm以下の炭化物含む。しまり強い。粘性弱い。
- ②黒褐色土(10YR3/1) 径1cm以下のローム粒多く含む。径2mm以下の炭化物少量含む。しまり弱い。粘性弱い。
- ③黒褐色土(10YR3/1) 径1cm以下のローム粒含む。しまり弱い。
- ④にぶい黄褐色土(10YR5/3) 径1mm以下のローム粒少量含む。しまり弱い。粘性強い。
- ⑤にぶい黄褐色土(10YR5/3) 径1cm以上のロームブロック多く含む。径2mm以下の炭化物含む。しまり弱い。粘性強い。

第18図 SK4

SK5 (第19図、PL.10)

H9グリッド、調査地東側平坦面に位置する。ローム層(Ⅷ層)上面で検出し、平面形は円形を呈す。検出面での規模は長軸0.77m、短軸0.68m、検出面からの深さは0.94mを測る。底面中央には、ピット1基を検出した。ピットの規模は長軸16cm、短軸15cm、底面からの深さは17cmを測る。埋土は7層に分層でき、黒褐色土と灰黄褐色土が堆積する。形態的な特徴から、落とし穴と考える。遺物は出土していない。

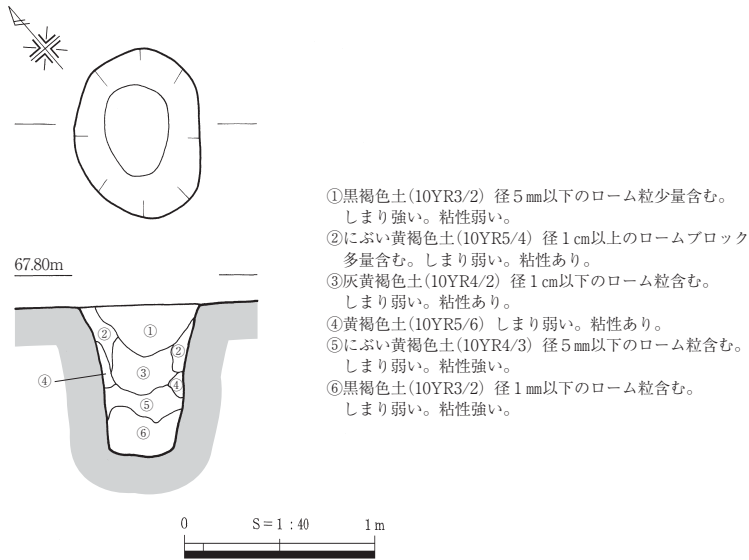


- ①黒褐色土(10YR2/2) 径5mm以下のローム粒少量含む。しまり弱い。粘性弱い。
- ②黒褐色土(10YR2/2) 径2mm以下のローム粒多く含む。しまり弱い。粘性強い。
- ③黒褐色土(10YR3/2) 径1cm以下のローム粒多く含む。しまり弱い。粘性強い。
- ④黒褐色土(10YR3/2) 径1mm以下のローム粒極少量含む。粘性強い。
- ⑤灰黄褐色土(10YR5/2) 径1mm以下のローム粒多く含む。しまり弱い。粘性強い。
- ⑥灰黄褐色土(10YR4/2) 径2mm以下のローム粒多く含む。しまり弱い。粘性強い。
- ⑦灰黄褐色土(10YR4/2) しまり弱い。粘性強い。

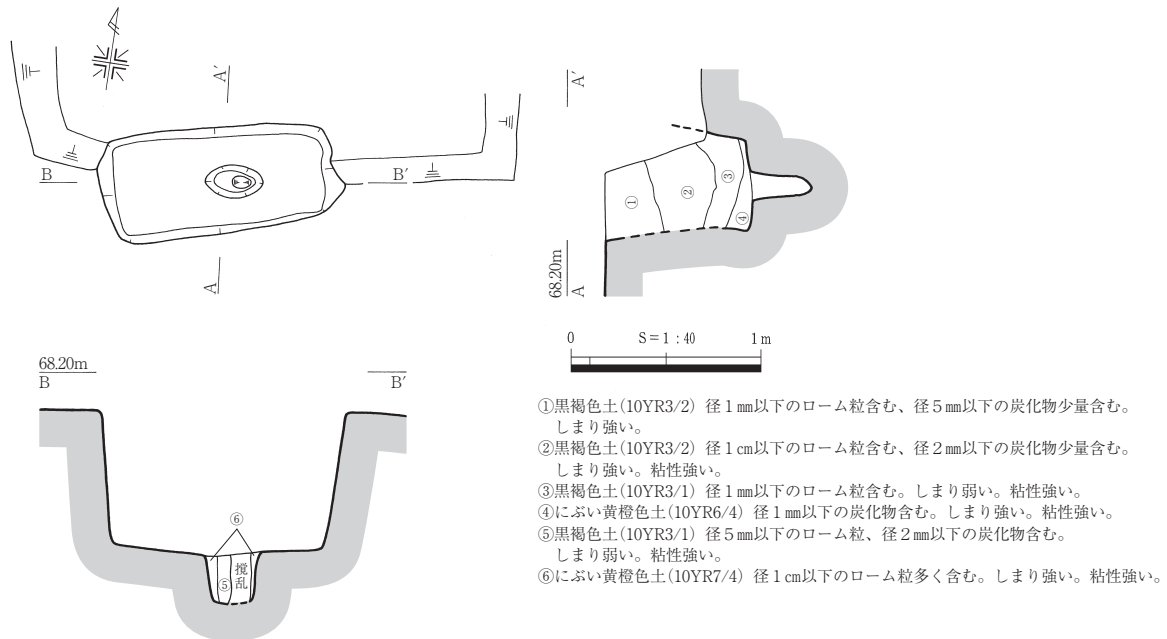
SK6 (第20図、PL.9)

J11グリッド、調査地中央平坦面の標高67.60m付近に位置する。平面形は楕円形で南北0.90m、東西0.65m、深さ0.80mを測る。埋土は6層に分層でき、黒褐色土を主体としている。底面の断面形状は丸底である。遺物は出土していない。やや規模が小さいものの、落とし穴と考える。

第19図 SK5



第20図 SK6



第21図 SK7

SK7 (第21図、PL.10)

K11グリッド、調査地南壁際平坦面に位置する。ローム層(VIII層)上面で検出し、北側の遺構上部は削平されている。平面形は長方形を呈し、検出面での規模は長軸1.26m、短軸0.55m、検出面からの深さは0.72mを測る。底面中央には、ピット1基を検出した。ピットの規模は長軸32cm、短軸17cm、底面からの深さは40cmを測る。埋土は6層に分層でき、黒褐色土とにぶい黄褐色土が堆積する。①～④層は周囲からの流入、および壁面からの崩落による堆積とみられる。底面ピットの埋土にあたる⑤層は逆茂木の痕跡の可能性、⑥層はその詰め土の可能性が有る。形態的な特徴から、落とし穴と考える。遺物は出土していない。

第4節 古墳時代後期から古代の調査

1 概要

遺構は、土坑3基(SK8~10)、溝1条(SD1)を調査した。SK8・9は、いずれも調査地北西向斜面上に検出し、両遺構とも近接した位置関係にある。SK8は製炭土坑と考えられ、炭化材が比較的良好な状態で出土した。SK9は焼土の検出が顕著な土坑であり、土坑底面に検出したピット内が被熱している。SK10は撓み状の形態をなし、埋土は上層にあたるⅢ層に由来するとみられ、甕口縁部片が出土している。SD1は区画溝である。調査地北側の傾斜変換点に位置し、直線的な平面形をなす。

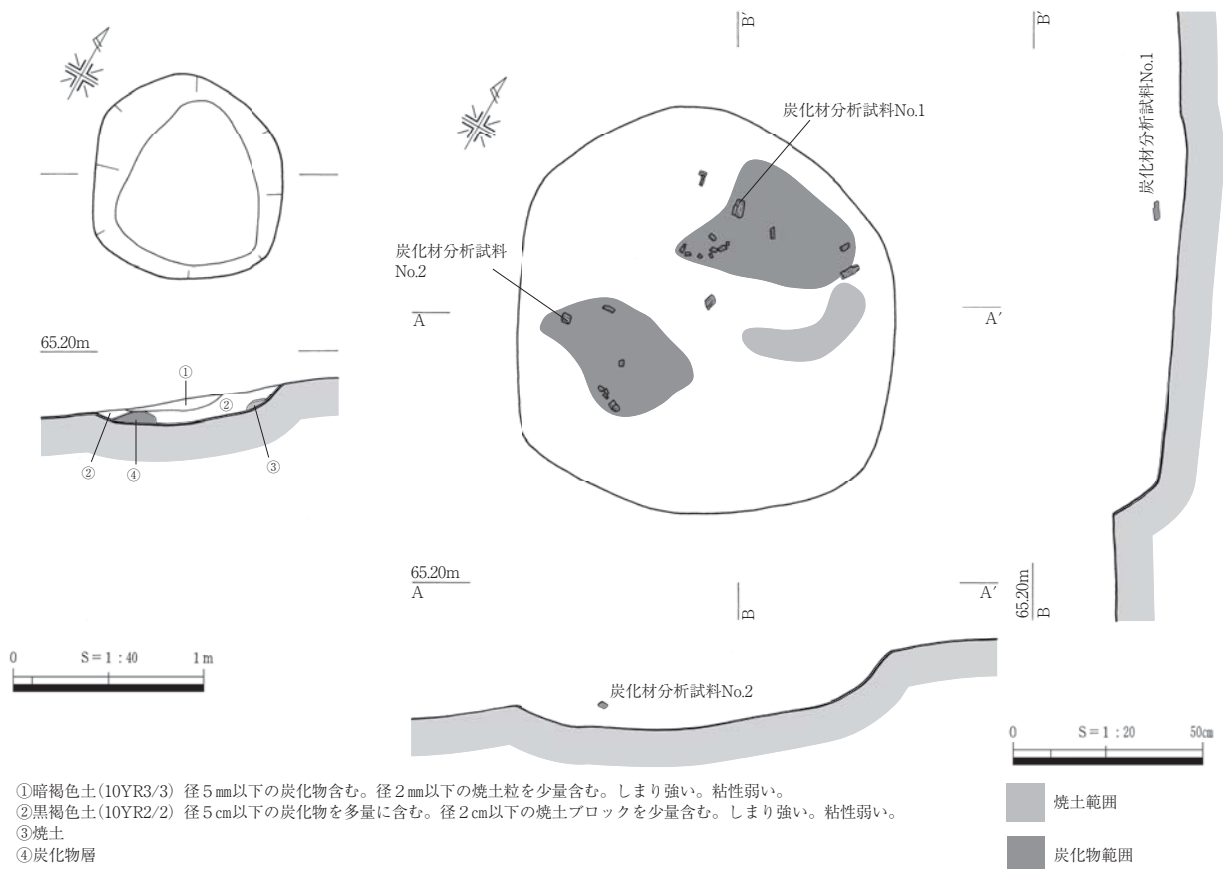
調査地内からは、少量ではあるが、SK10、および包含層(Ⅲ・Ⅳ層)より土師器、須恵器の土器類のほか、椀形鍛冶滓・流動滓などの鉄関連遺物が出土した。

近隣の古墳時代の状況としては、遺跡西側に近接する倉谷荒田遺跡⁽¹⁾、遺跡東側に近接する豊成上金井谷峰遺跡(第4章第5節)において、いずれも古墳時代前期の集落を確認しているが、中期以降の様相はあきらかとはなっていない。

古代の状況としては、本遺跡西側約1kmに位置する倉谷西中田遺跡において、8世紀代の集落を確認し⁽²⁾、当該期の状況が解明されつつある。

(1)『倉谷荒田遺跡』2011 鳥取県埋蔵文化財センター

(2)『倉谷西中田遺跡』2011 鳥取県埋蔵文化財センター



第22図 SK8

2 土坑

SK8 (第22図、PL.11)

I 15グリッド、調査地北西向き斜面の標高65.00m付近に位置する。遺構はII層下、V層上面で検出した。平面形は円形、長軸1.15m、短軸1.06m、検出面からの深さは最大0.13mを測る。埋土は4層に分層でき、①・②層はいずれも炭化物、焼土を含み、特に②層は炭化物の出土が顕著である。③層は焼土層、④層は炭化物層である。④層中より炭化材も出土している。底面および壁面に被熱により赤化した痕跡は検出していない。遺構の機能としては、遺構に明確な被熱痕跡は認められないものの、遺構の形態、炭化物や焼土の出土状況から判断し、本遺構は製炭土坑である可能性が高い。

出土した炭化材は放射性炭素年代測定を行った(第3章第8節)。分析の結果、2σ暦年代範囲において619-671calADなどの値を得た。

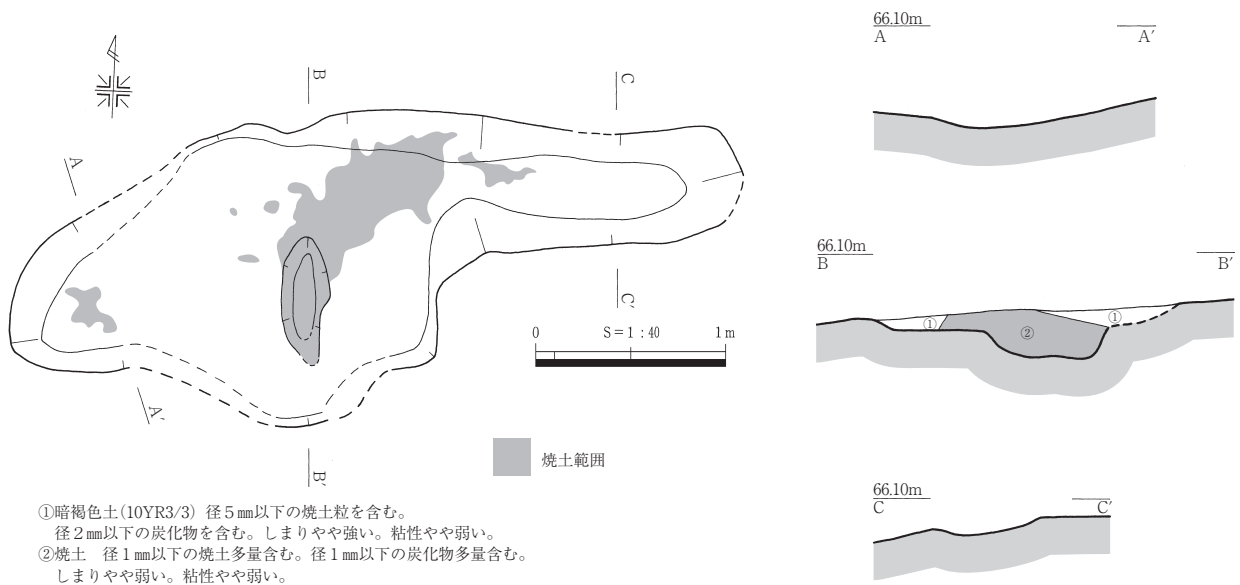
遺構の時期は、放射性炭素年代測定結果より、古墳時代終末期に帰属すると考える。

SK9 (第23図、PL.12)

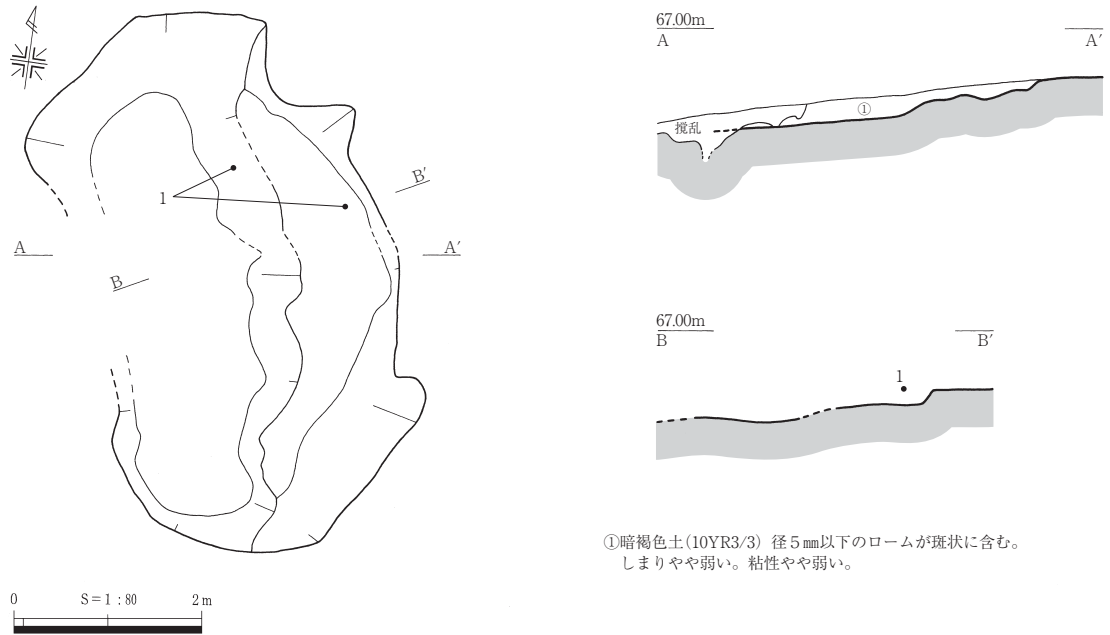
J 15グリッド、調査地北西向き斜面の標高66.00~65.60m付近に位置する。遺構はIV層除去後、V層上面で検出した。平面形は縦長の不整形で、規模は長軸4.00m、短軸1.65m、検出面からの深さは0.11mを測る。埋土は2層で①層は暗褐色土、②層は焼土層である。土坑底面および壁面には、被熱による痕跡は認められない。

土坑の底面中央部には楕円形のピットを1基検出した。ピット内には②層が落ち込んでいる。ピットの壁面及び底面は、被熱により赤化している。

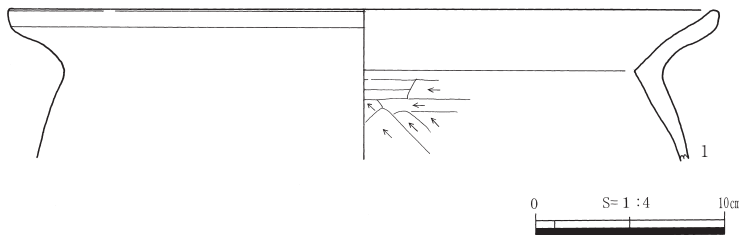
遺構内より遺物は出土していない。遺構が古代の遺物包含層であるIV層により被覆されていることから判断し、本遺構の帰属時期は古代以前と考える。



第23図 SK9



第24図 SK10



第25図 SK10出土遺物

SK10(第24・25図、PL.13)

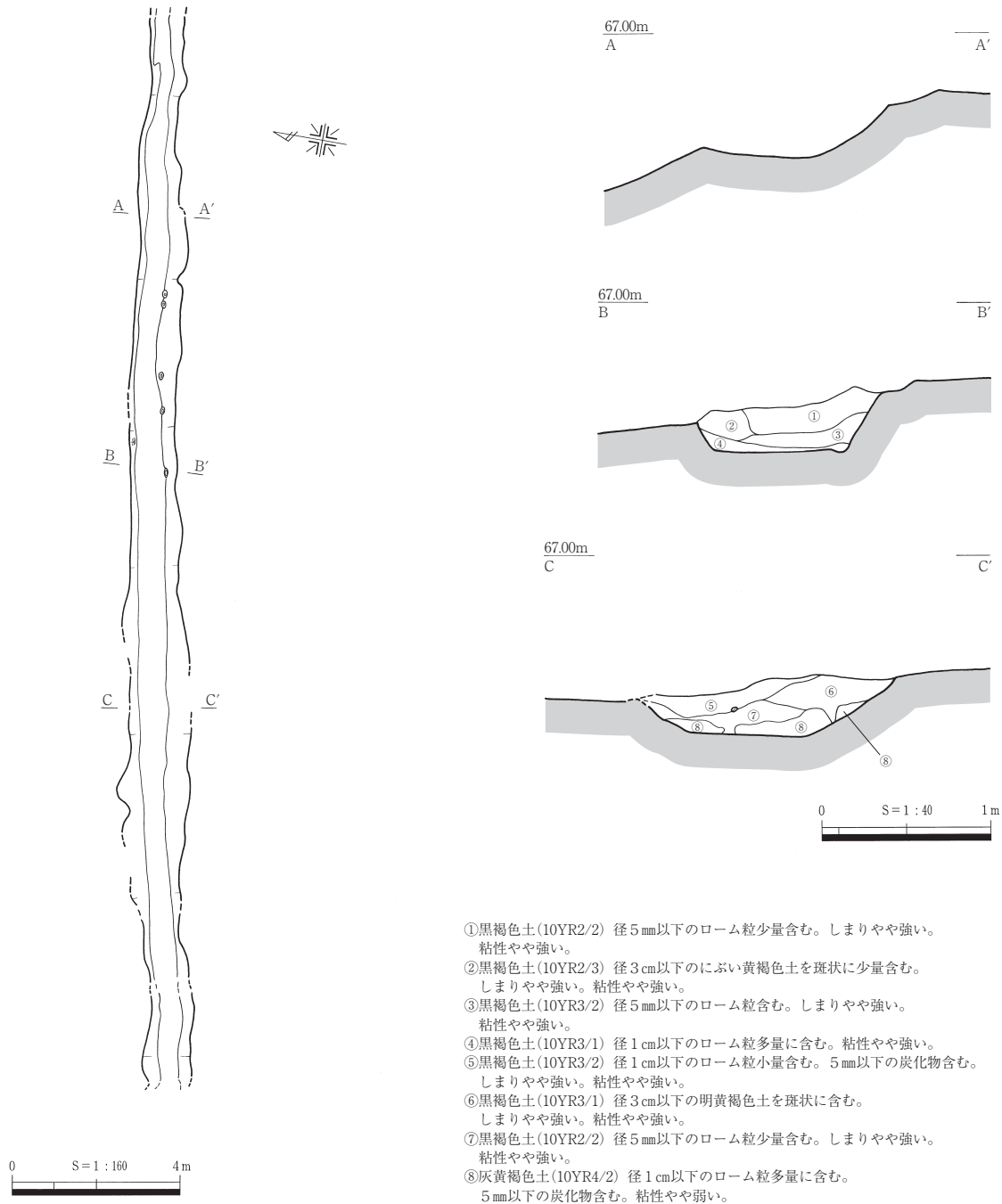
J 14・15グリッド、調査地南西隅の斜面部に位置する。Ⅲ層除去後、Ⅳ層上面で検出した。平面形は歪な長楕円形を呈す。遺構底面には僅かに起伏があり、浅い撓み状をなす。検出面での規模は長軸5.63m、短軸2.53m、検出面からの深さは最大0.46mを測る。埋土はⅢ層に由来するとみられる暗褐色土の単層である。埋土中から、土師器甕1が出土した。

本遺構の帰属時期は出土遺物より、古代と考える。

3 溝

SD 1 (第26図、PL.14・15)

E 10~13グリッド、調査地平坦面の北側縁辺に位置する。Ⅳ層下、Ⅴ層上面に溝を検出した。本遺構はほぼ東西方向を主軸とする直線的な溝である。遺構東側は調査地外へ延び、西側の上部は道路状遺構により掘削、破壊される。検出した範囲の規模は、全長25.10m、幅0.70~1.70m、検出面からの深さは東端0.2m、西端0.04mを測る。底面の標高は東端66.34m、西端65.91mであり、東西の比高差は43cmである。断面形は逆台形、あるいはU字状を呈す。埋土はⅤ層に由来するとみられる黒褐色土が主体をなし、砂礫の混入は認められない。なお、A-A'、B-B'間の遺構壁面と底面の傾斜変換点



第26図 SD 1

において、径15~20cm程度の小ピットを検出した。これらの小ピットは、遺構の内側から外側に向けて掘削される。小ピットの埋土は黒褐色土である。溝内から、遺物は出土していない。

本遺構はIV層に被覆されており、埋土はV層に由来するものであることから、IV層堆積時にはすでに埋没していたものと考えられる。

4 IV層出土遺物(第28図、PL.18)

IV層では、E11グリッドにおいて、鍛冶関係遺物が出土した。F1は小型の椀形鍛冶滓である。左右側面及び下面は、破面となる。F2・3は流動滓である。ともに鍛冶系遺物と考える。

5 Ⅲ層出土遺物(第27・29図、PL.17・18)

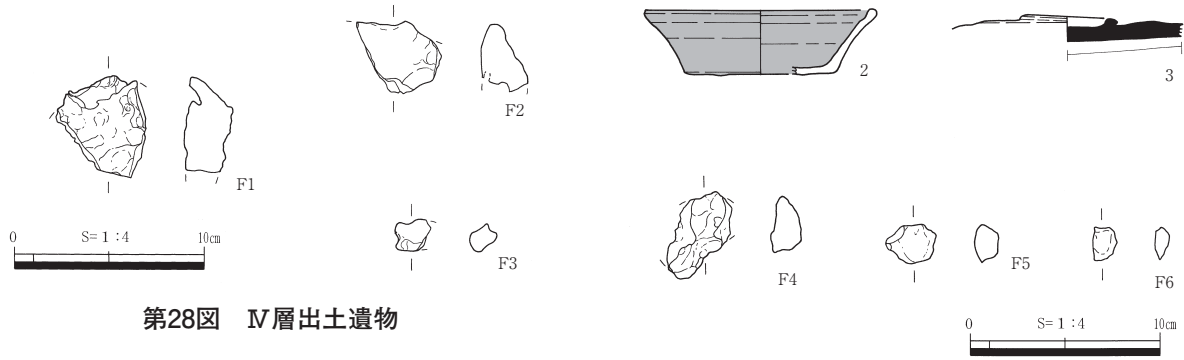
Ⅲ層からは、奈良時代から平安時代に帰属する遺物が出土した。2は、内外面赤彩の土師器の坏である。坏部は口縁部に向かい外反しながら立ち上がり、口縁端部は回転ナデで仕上げられる。口縁端部の内面は断面に丸みをもつ。底部は押圧により調整がなされる。9世紀代のものとする。

3は須恵器の坏蓋である。口縁部は欠損し天井部のみが残存する。輪状のつまみがつく。内面には部分的に擦れて平滑な箇所が確認でき、何らかの用途で転用されたようである。なお、墨の痕跡は認められない。8世紀代のものとする。

F 4～6は鉄関連遺物である。F 4がH14グリッドにおいて、F 5・6はG14グリッドにおいて出土した。F 4は極小の椀形鍛冶滓である。下面には炉床が固着している。F 5は極小の椀形鍛冶滓である。左側部には、小破面が認められる。古代のものとする。



第27図 Ⅲ層堆積範囲図



第28図 IV層出土遺物

第29図 III層出土遺物

第5節 時期不明の遺構

1 概要

本節では、表土直下で検出した遺構のうち、帰属時期の特定が困難な遺構について報告する。

2 土坑

SK11(第30図、PL.13)

H12グリッド、調査地中央部平坦面に位置する。表土直下、Ⅷ層上面で検出した。平面形はやや歪な長楕円形を呈す。検出面での規模は長軸2.60m、短軸0.86m、検出面からの深さは0.33mを測る。埋土は灰黄褐色土など、やや暗い褐色系の土が主体をなし、自然堆積の様相を示す。遺物は出土していない。本遺構の帰属時期は不明である。

SK12(第31図、PL.13)

G12グリッド、調査地中央部平坦面に位置する。表土直下、Ⅴ層上面で検出した。遺構の北側は調査地外に延びるが、削平されている。検出面での規模は、長軸3.03m、短軸1.30m、検出面からの深さは最深0.30mを測る。埋土は灰黄褐色土の単層である。遺物は出土していない。本遺構の帰属時期は不明である。

3 溝

SD2(第32図、PL.15・16)

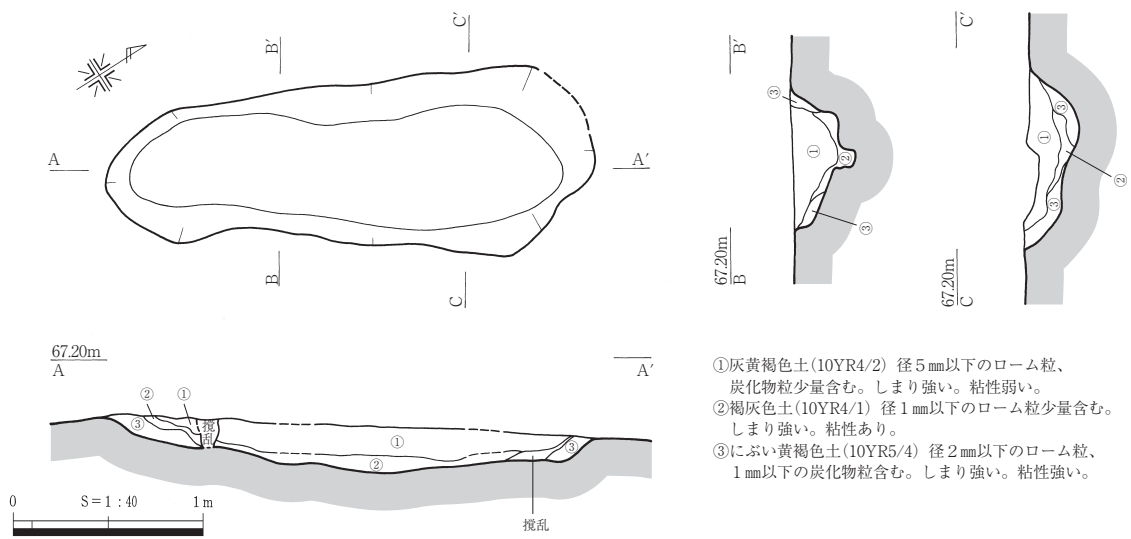
I13～J14グリッド、調査地平坦面の西側縁辺に位置する溝である。表土直下、Ⅷ層上面で検出した。僅かに弧状に湾曲するものの、主軸はほぼ南北である。遺構南側は調査地外へ延び、北側は削平される。検出した範囲の規模は、全長17.25m、幅0.90～2.70m、検出面からの深さは南端0.20m、北端0.10mを測る。底面の標高は南端66.96m、北端66.42mであり、南北の比高差は54cmである。断面形は浅い皿状を呈す。埋土は、Ⅴ層に由来する黒褐色土などの4層に分層でき、自然堆積の様相を示す。埋土に流水の痕跡は認められない。溝内から、遺物は出土していない。本遺構の帰属時期は不明である。

4 道路状遺構

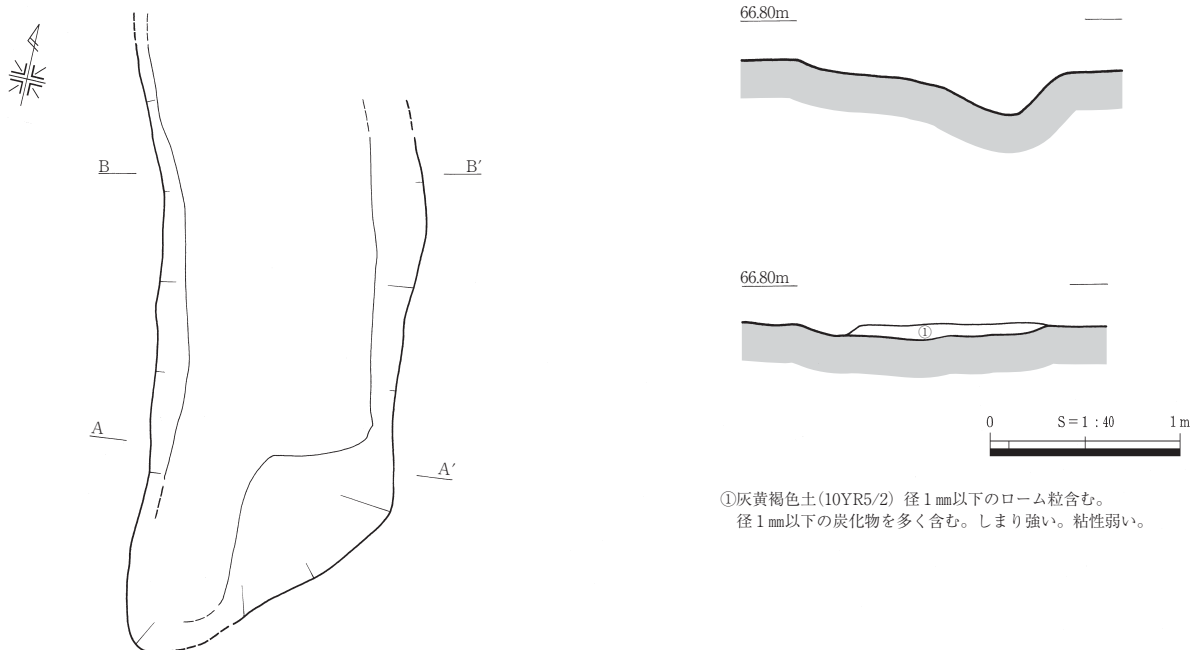
道路状遺構(第33図、PL.16・17)

E11~F13グリッド、調査地北側平坦面に位置する。IV層上面において検出した。検出時に、東西を主軸とする並行する2列の地面が硬く締まった範囲(以下、「硬化面」と呼称する)が認められたことから、道路の可能性が高いと判断し、調査を行った。遺構東側の大部分は削平により遺存状態が悪く、西側は溝状の形態をなし、調査地外へと延びる。

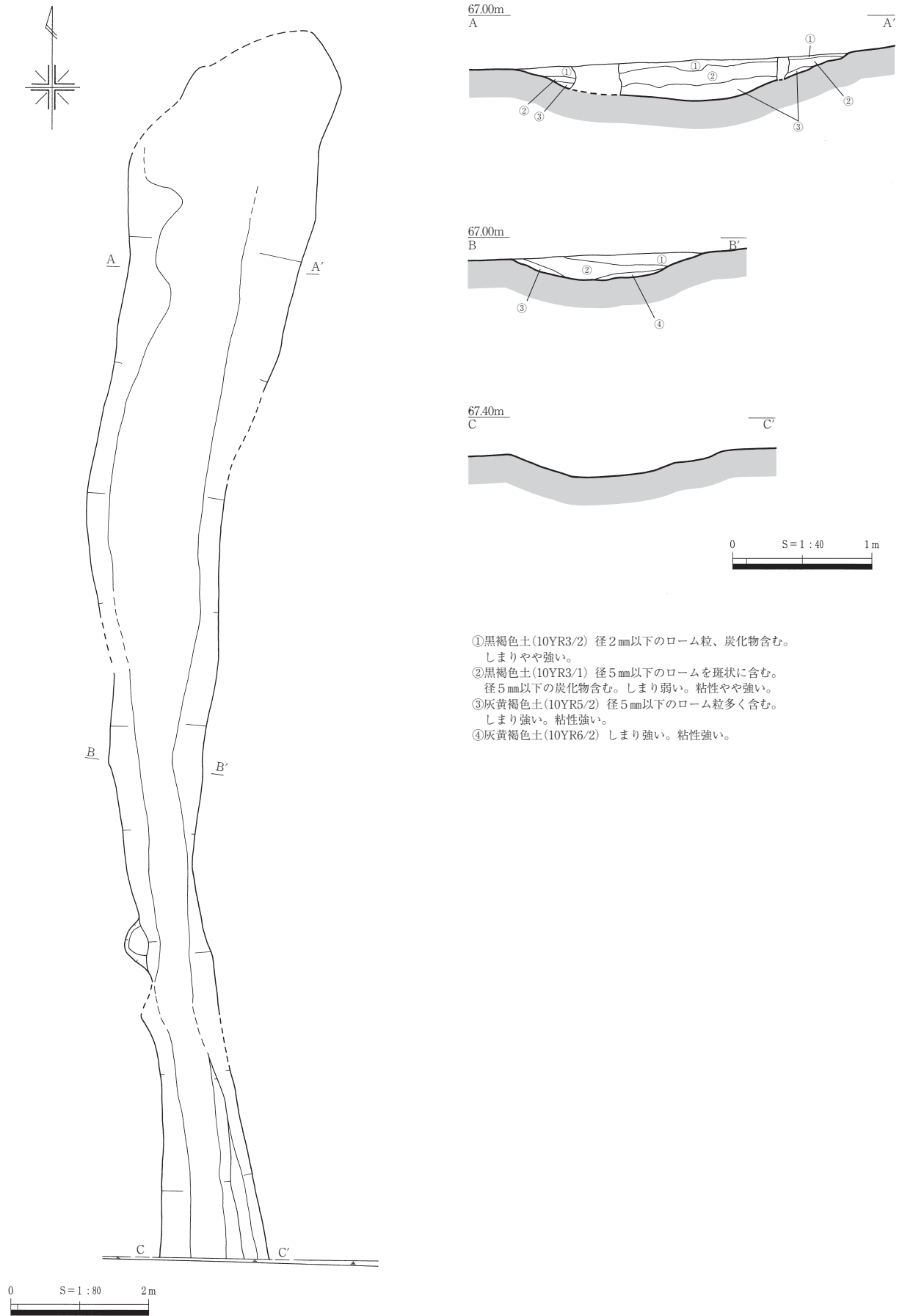
本遺構は遺構東側と西側では様相が異なる。東側は途切れながらも並行する筋状の硬化面を2列検出した。検出状況から、硬化面は荷車などの車両の轍の痕跡であると考え。筋状の硬化面の幅は8~90cmを測り、並行する2列の硬化面間の距離は、0.8~1.3mである。A-A'、B-B'部分では、轍が小規模な溝状の凹みをなす。凹みの壁面、底面ともに著しく硬化している。硬化面は、色調の違いにより3層に分層できた(①~③層)。①~③層は重複した轍の痕跡であると考え。



第30図 SK11



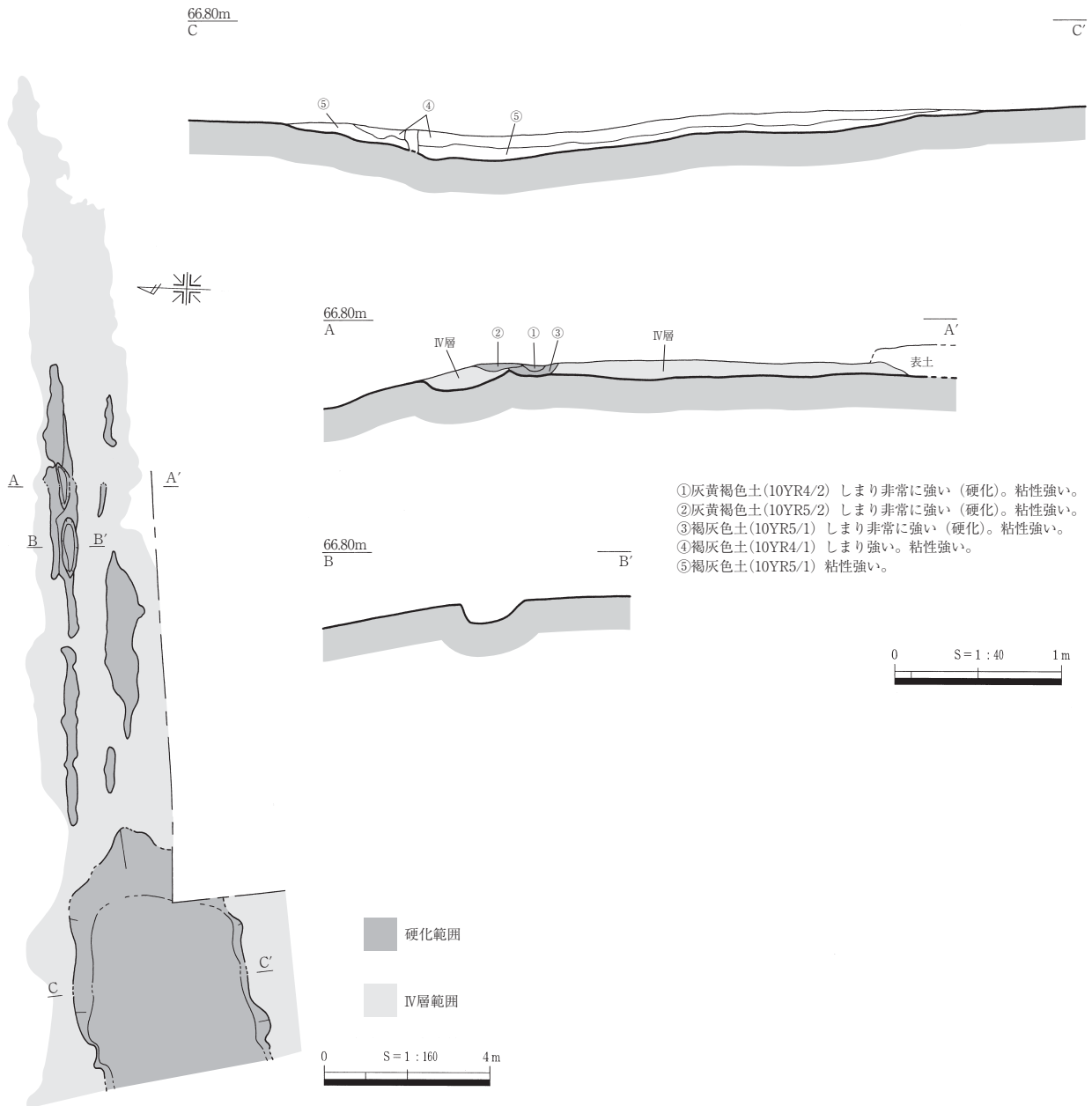
第31図 SK12



第32図 SD2

西側は溝状の凹地となり、検出面での幅4.33m、検出面からの深さが0.27mを測る。凹地の壁面、底面ともに著しく硬化している。底面に轍などの痕跡は認められない。埋土は、粘性の強い褐灰色土である④・⑤層が堆積する。④・⑤層に砂礫は混入せず、硬化面、轍などの痕跡も認められない。なお、④層はしまりが非常に強い堆積であり、④層上面が路面である可能性も考えられる。

本遺構から、遺物は出土していない。本遺構の帰属時期は不明である。



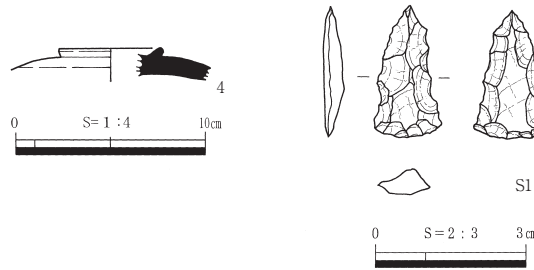
第33図 道路状遺構

第6節 調査地内出土遺物

(第34図、PL.17)

本節では、調査地内の攪乱土中より出土した遺物について報告する

4は須恵器の坏蓋で天井部のみ残存し、輪状つまみがつく。古代に帰属するものと考え。S1は安山岩製の平基式石鏃である。



第34図 調査地内出土遺物

第7節 豊成上神原遺跡遺物観察表

表3 出土土器観察表

遺物番号	取上番号	遺構地区 層位名	挿図 PL	種類 器種	口径(cm) 底径(cm) 器高(cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	47・57	SK10	第25図 PL.18	土師器 甕	※37.0 - △8.0	外面ナデ。 内面口縁部ナデ。ナデ範囲口縁部内面の稜におよぶ。胴部ケズリ。	密(微砂粒を多く含む)	良	内外面にぶい黄橙色	
2	17他	H14 Ⅲ層	第29図 PL.17-18	土師器 坏	※12.0 ※8.0 3.4	外面口縁部回転ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ、押圧。赤色塗彩。 内面回転ナデ。赤色塗彩。	密	良	内外面明黄褐色・明赤褐色	
3	25	J5 Ⅲ層	第29図 PL.18	須恵器 坏蓋	- △1.4	外面回転ナデ。輪状つまみ。 内面ナデ。一部平滑な範囲あり。	密	良	内外面灰色	つまみ径4.4※
4	15	攪乱土	第34図 PL.18	須恵器 坏蓋	- △1.7	外面回転ナデ。輪状つまみ。 内面ナデ。	密	良	外面灰色内面オリーブ灰色	つまみ径5.4※

表4 出土石器観察表

遺物番号	取上番号	遺構地区 層位名	挿図 PL	種類	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
S1	7	J11 攪乱土	第34図 PL.17	石鏃	安山岩	2.6	1.4	0.5	1.0	平基式石鏃。素材剥離面が残存している。

表5 鉄関連遺物観察表

遺物番号	取上番号	遺構地区 層位名	挿図 PL	遺物名	計測値(cm)			重量(g)	磁着度	メタル度	備考
					長さ	幅	厚さ				
F1	13	E11 Ⅳ層	第28図 PL.18	腕形鍛冶滓 (小)	4.7	5.4	2.6	90.57	1	なし	左右の側部と下手側の側部が破面となった小型の腕形鍛冶滓。
F2	14	E11 Ⅳ層	第28図 PL.18	流動滓 (鍛冶系?)	4.6	3.8	2.5	54.55	2	なし	左側部と右側部が破面となった流動滓。鍛冶系か?
F3	13	E11 Ⅳ層	第28図 PL.18	流動滓 (鍛冶系?)	1.8	1.7	1.5	7.65	1	なし	右側部が破面となった流動滓。鍛冶系か?
F4	24	H14 Ⅲ層	第29図 PL.18	腕形鍛冶滓 (極小・含鉄)	3.6	4.6	1.6	30.11	4	H (○)	左側部と右側部が破面となった極小の腕形鍛冶滓。下面に矽床土が固着する。
F5	22	G14 Ⅲ層	第29図 PL.18	腕形鍛冶滓 (極小・含鉄)	2.7	2.1	1.3	9.52	2	錆化 (△)	左側部に小破面を持つ極小の腕形鍛冶滓。
F6	23	G14 Ⅲ層	第29図 PL.18	鍛冶滓 (含鉄)	1.3	1.8	0.7	2.16	2	錆化 (△)	含鉄の鍛冶滓。

第8節 自然科学分析の成果

豊成上神原遺跡出土炭化材の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

伊藤茂・尾寄大真・丹生越子・廣田正史・小林紘一

Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・竹原弘展

1 はじめに

西伯郡大山町豊成に位置する豊成上神原遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

2 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表6のとおりである。試料は土坑SK8出土の炭化材2点である。

表6 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-15195	遺構：SK8 試料No.1 取上No.79 層位：③層(埋土最下層)	試料の種類：炭化材 試料の性状：不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸 :1.2N,水酸化ナトリウム:0.1N,塩 酸:1.2N)
PLD-15196	遺構：SK8 試料No.2 取上No.81 層位：③層(埋土最下層)	試料の種類：炭化材 試料の性状：不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸 :1.2N,水酸化ナトリウム:0.1N,塩 酸:1.2N)

試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

3 結果

表7に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}C$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に較正した年代範囲を、第35図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代(yrBP)の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期 5730 ± 40 年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.1(較正曲線データ: Intcal09)を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表7 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-15195 試料No.1	-25.80 ± 0.22	1381 ± 20	1380 ± 20	645AD (68.2%) 662AD	619AD (95.4%) 671AD
PLD-15196 試料No.2	-26.32 ± 0.16	1463 ± 18	1465 ± 20	580AD (68.2%) 623AD	566AD (95.4%) 642AD

4 考察

得られた暦年代範囲の分布を第36図に示す。なお木材の場合、最外年輪部分を測定すると枯死・伐採年代が得られるが、内側の部分を測定すると最外部からの年輪分だけ古い年代が得られる(古木効果)。よって最外年輪が確認されていない試料については、古木効果の影響を考慮しておく必要がある。

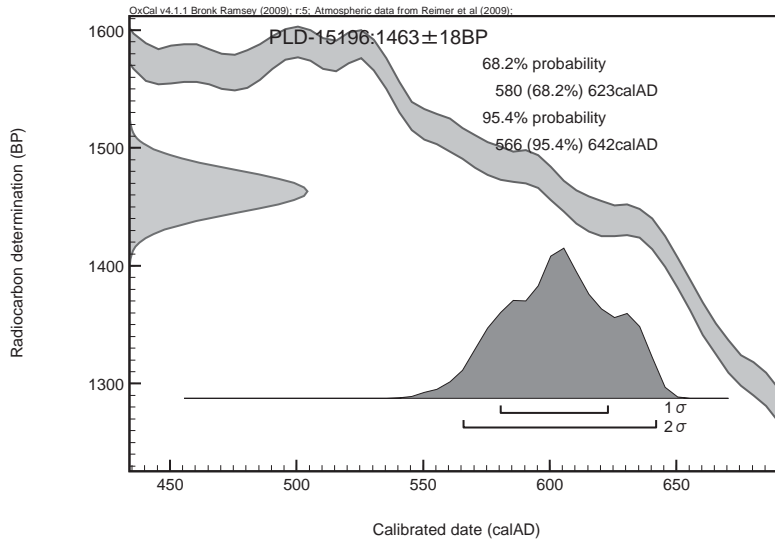
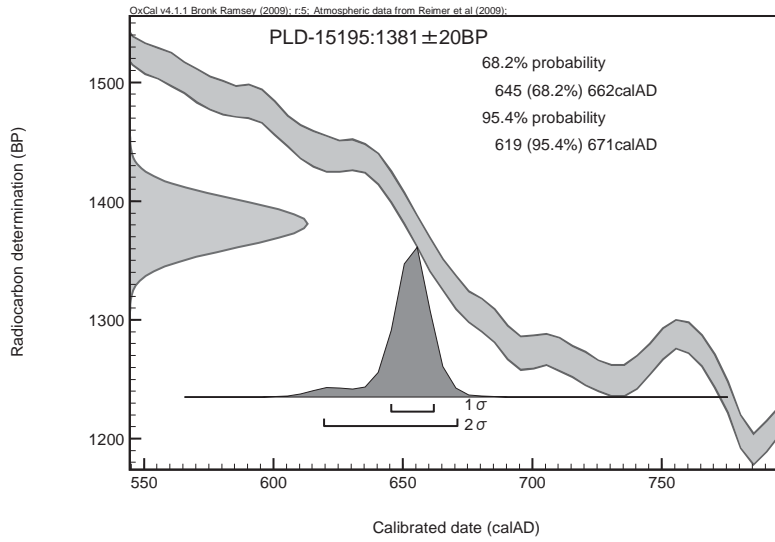
PLD-15195は、 1σ 暦年代範囲で645-662calAD (68.2%)、 2σ 暦年代範囲で619-671calAD (95.4%)となり、7世紀の範囲を示した。

PLD-15196は、 1σ 暦年代範囲で580-623calAD (68.2%)、 2σ 暦年代範囲で566-642calAD (95.4%)となり、6世紀後半～7世紀中頃の範囲を示した。

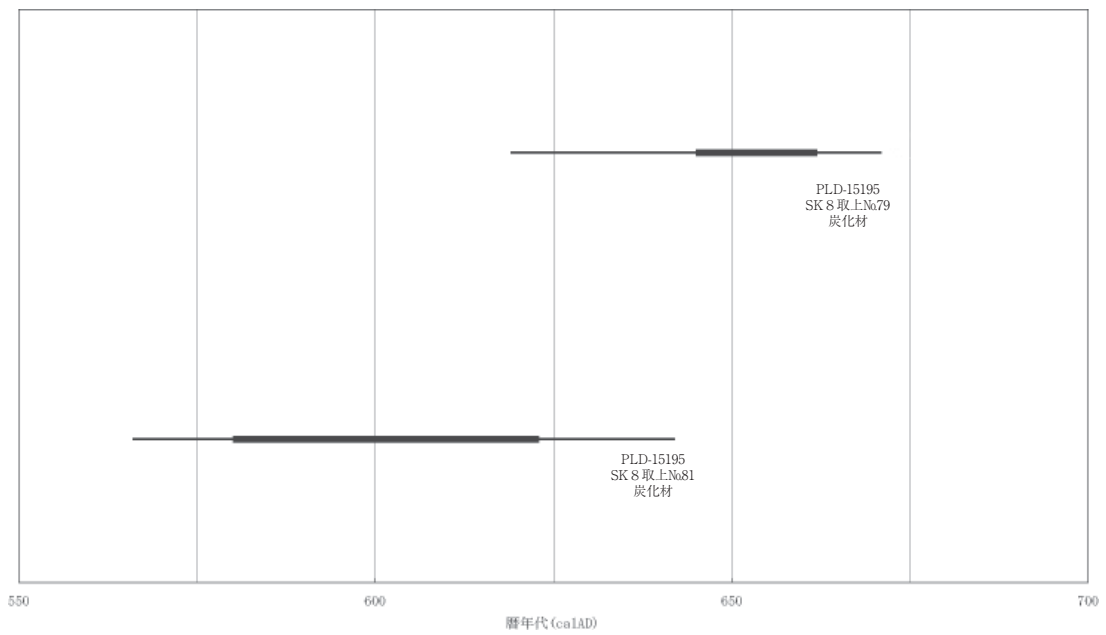
いずれも飛鳥時代に相当する範囲を示した。 1σ 暦年代範囲で比較すると、取上No.79の試料の方が取上No.81の試料よりやや新しい可能性がある。ただし両者とも最外年輪が確認されておらず、古木効果の影響を考慮する必要がある。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.
- Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.
- 中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代, 3-20.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.



第35図 暦年較正結果



第36図 暦年代の分布 (太線：1σ，細線：2σ)

第9節 豊成上神原遺跡の総括

豊成上神原遺跡では調査の結果、溝2条、土坑12基、道路状遺構1条を検出した。また、総数は少ないものの、古代の土器、鉄滓、サヌカイト製の石鏃等が出土している。ここでは、本遺跡の調査成果を時代毎に概観し、まとめとしたい。

縄文時代

出土遺物から縄文時代に明確に帰属すると判断できる遺構はないが、SK1～7は形態的特徴から判断し、落とし穴と考えられ、当該期に帰属するものと判断した。これらの土坑は、丘陵平坦面から傾斜変換点にかけての丘陵上に展開し、谷部には存在しない。これら落とし穴群のうち、等高線に沿うような配置を示すもの(SK1・2、およびSK3～5)がみられる。このような配置を示す要因は、水平方向に延びる獣道が存在し、そこが狩猟の場としての環境に適していたと考えることができる。各落とし穴の同時性は確認できないが、継続的に幾筋かの獣道に沿って落とし穴が掘削されていた可能性は指摘できる。隣接する豊成上金井谷峰遺跡でも類似性を認めることができる(第4章第11節)。

本遺跡の落とし穴には、平面形が円形のもの(SK1・2・5・6)と長方形を呈するもの(SK3・4・7)の2種類がある。また、土坑底面にピットを有するもの(SK1・3～5・7)と、有さないもの(SK2・6)が存在する。これらの形態的な差異は、時期あるいは捕獲する対象物による違いを示す可能性があるが、判断できなかった。

出土遺物は、縄文時代のものとみられるサヌカイト製の石鏃が1点出土している。

古墳時代後期から古代

当該期の遺構としては、SK8～10、SD1があげられる。遺物としては、Ⅲ層除去後に、Ⅳ層上面で検出したSK10から、古代に帰属する土師器甕片が、やや散乱するような状況で出土している。また、包含層Ⅲ・Ⅳ層から8～9世紀の土器、この時期のものとみられる鉄滓・流動滓といった鉄関連遺物が出土している。流動滓が出土していることから、調査地周辺に精錬鍛冶に関連する遺構が存在する可能性がある。

当該期の遺構のうち、SK8・9、SD1は、Ⅳ層除去後に、Ⅴ層上面にて検出している。SK8は製炭土坑とみられ、平面円形の土坑内では炭化物、焼土を検出している。出土した炭化材を放射性炭素年代測定した結果、6世紀後半から7世紀代の年代が得られた(第3章第8節)。

SK9は検出面から判断し、古代以前に帰属する遺構である。不整な平面形態をなし、底面中央部には焼土が顕著にみられる。SK9は調査地北西向斜面で検出し、直線距離約14m北側には同一遺構面で検出したSK8が近接する。

SD1は東西を主軸とし、比較的直線的な平面形をなす溝である。埋土に流水の痕跡は認められず、区画溝と考えられる。SD1埋没後は、道路状遺構がほぼ同位置に重複して掘削され、現代においても道が設置されている。SD1を検出した調査地北側は、地形の傾斜変換点ということもあり、後世においても土地の境界としての意識が高いことがうかがわれる。

遺跡周辺に当該期の集落が展開し、本遺跡はその縁辺部に相当するものと想定している。

その他、帰属時期が不明な遺構

調査地は大規模な造成、および耕作に係わるとみられる攪乱など、各遺構検出面に後世の影響がか

なり及んでいる。そのため検出した遺構のうち、表土直下で検出し、出土遺物がなく、遺構の形態的特徴による帰属時期の推定が困難なものを、帰属時期が不明な遺構として扱った。SK11・12、SD2、道路状遺構が該当する。

SK11・12はいずれも灰黄褐色土など、にぶい褐色系の埋土が堆積する。比較的表土(耕作土)に近い色調を呈し、しまりが強い堆積である。ともに底面に凹凸が認められる点も類似する。

SD2は、僅かに弧状に湾曲するものの、ほぼ南北方向の区画溝である。丘陵平坦面の縁辺部に位置し、本遺構の西側は斜面となる。埋土はV層に由来するとみられる黒褐色土が主体となす。砂礫は混入せず、流水の痕跡はうかがえない。

同じ区画溝とみられるSD1とSD2は、ともに全長20m前後のものであり、検出面での幅にはやや差があるものの、概ね同規模の溝と判断して大差ないと思われる。両遺構とも平坦面縁辺部に位置し、平面的に直交する位置関係を示す。埋土は、ともにV層由来とみられる黒褐色土が堆積する。SD1・2は、平面的な位置関係、規模・埋土の類似性から判断して、検出面を異にするものの、関連性をうかがわせる資料である。

以上、調査成果を概観してきた。本調査により、縄文時代に狩猟の場であった当地は、落とし穴が水平方向に延びる獣道に沿って配列された可能性を指摘した。また、近隣に古代の集落が存在する可能性が高まるなど、新たな知見も得られた。しかしながら、遺構、遺物とも密度が希薄であったことから、当地の各時期の様相を解明するところまでには至っていない。今後、調査例の増加により、より詳細な検討が可能となることに期待したい。